The 45th Commemorative Sapporo International Night 2022

第45回記念サッポロ・インターナショナル・ナイト

“若者よ、世界へ！” Part Ⅲ(final)

Young people! Let’s aim for the world!

REPORT 記録集

＜Date & Time＞December 11 (Sunday), 2022　10:30~17:00

＜Venue＞Keio Plaza Hotel Sapporo (Kita-5, Nishi-7)
Kaderu 2・7 (Kita-2, Nishi-7)

豊かな大地に輝く懸け橋に

アークスグループは、地域のライフラインとして価値ある商品、
サービスを低価格で提供し、豊かな暮らしに貢献します。

ARCS アークスグループ

株式会社アークス　代表取締役社長　横山　清

札幌市中央区南13条西11丁目2番32号　TEL. 011-530-1000

北海道・東北・北関東地方に広がる374店舗

グループ企業

㈱ラルズ　㈱ユニバース　㈱ベルジョイス　㈱福原

㈱道北アークス　㈱東光ストア　㈱道南ラルズ

㈱道東アークス　㈱伊藤チェーン　㈱オータニ　㈱エルディ

The 45th Commemorative Sapporo International Night

第 45 回記念サッポロ・インターナショナル・ナイト

“若者よ、世界へ！” part Ⅲ (final)

Young people, Let's aim for the world!

第４５回を迎えた今年度は、記念講演者に彬子女王殿下をお迎えし、
世界３１カ国の留学生と、各国の歴史や文化、教育等について学び、語り合った
Life is either a daring adventure or nothing（Helen Adams Keller）
高校生の皆さんに、未来に駆せる大きな夢を育んでいただけたものと思う

<Date & Time>

2022 年 12 月 11 日(日) 10:30 ～17:00、受付：10:00 ～
（December 11, Sunday, 2022）

<Venue>

第１会場　京王プラザホテル札幌（Keio-plaza Hotel Sapporo）
第２会場　かでる２・７（Kaderu 2·7）

【主　催：Sponsor】
(一財) 北海道青少年科学文化財団
The Hokkaido Youth Foundation for Science and Culture

【共　催】
(公社) 北海道国際交流・協力総合センター、札幌ユネスコ協会

【後　援】
北海道、札幌市、(公財) 札幌国際プラザ

【協　賛】
(株)アークス、いけばなインターナショナル札幌支部、(株)京王プラザホテル札幌

●

（企画・運営 Planning & Management）
サッポロ・インターナショナル・ナイト実行委員会
The Sapporo International Night Executive Committee

目次

The 1st Part＜第45回記念講演＞「海外で日本を学ぶ」御講演者　彬子女王殿下・・・・・ 3

開会のご挨拶　一般財団法人北海道青少年科学文化財団理事長 岸浪 建史・・・・・ 4

御講演の記録　御講演者　彬子女王殿下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5

お礼のご挨拶　実行委員長（北海道大学理事・副学長）横田　篤・・・・・ 12

The 2nd Part　世界を知ろう！（第2部プログラム）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13

Group A.　アジア・オセアニア（Asia / Oceania）*Report by Canbul Ozge（Turkey）・・・・ 14

Nepal・Australia・Kazakhstan・Cambodia・〈Mongolia〉

Impressions & Comments (Canbul Ozge・Yao Bo Chen・
今野美香・小倉悦子・小野彩花・佐々木真那)

Group B ヨーロッパ・アフリカ（Europe / Africa）* Report by 鶴田和大（札幌国際大学）・・ 19

Cabo Verde・Egypt・Belgium・Czech・〈Italy〉

Impressions & Comments (Rahman Sadniman・Kiera・小林智佳子・
林　祥史・三好 菜乃・佐孝琉菜・Natdanai・Dani)

Group C 北米・中南米（North America / Latin America）*Report by Ranjani Rajagopal（India）24

Mexico・El Salvador・（Colombia・Brazil・Canada）

Impressions & Comments (上島　忍・児島充子・Rakesh Dixit・田口 美音・
野村 花音・塚田 桃子・大平 あい・Donaviphou・Alifya)

Group D 世界選抜（The 5 countries in the world）*Report by Yannick Oliveira（Angola）・・ 29

India・Turkey・Finland・Canada・Congo

Impressions & Comments (遠藤雅公・池田達昭・河合 くるみ・佐藤 羽純・
伊山 陽菜・Somsiri・Alyssa・Nethara・Zaki・Wnag Che)

The 3rd Part: Presentations “Let’s Shere!” (第3部プログラム)・・・・・・・・・・・・・・ 34

ご挨拶　実行委員長　横田　篤・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 35

おことば　彬子女王殿下・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36

お祝辞　札幌市長　秋元　克広 様・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

第2部発表（Group A ～ Group D）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 38

出席者を代表して（ご感想）　札幌ユネスコ協会会長　横山　清 様・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

【資料】第45回参加者、参加国・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

閉会ご挨拶　北海道青少年科学文化財団理事長　岸浪　建史・・・・・・・・・・・・・ 41

ＡＦＳ高校生や参加高校の記念集合写真アラカルト・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

司会者・ハイブリット担当の皆さんから・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 42

高校顧問の先生方から・・・ 44

第45回、開催への道のり（第1回実行委員会～開催当日まで）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

新聞報道（彬子女王殿下のご講演・読売新聞）・主催者担当役員感想・・・・・・・・・・・・・ 47

次回以降を考える（主催財団専務理事）・第45回参加実行委員会、高等学校のご紹介・・・・・ 48

The1st Part（第１部）：第45回記念講演

記念講演　海外で日本を学ぶ

ご講演者　彬子女王殿下

京王プラザホテル札幌（Eminence hall) 10:30〜11:30/Dec.11.2022　*Hybrid

お花の提供：
いけばなインターナショナル札幌支部

Emocee：曽ケ端　春南（立命館慶祥高）
Ruzgar Ozgonul（Turkey)

開会のご挨拶

一般財団法人 北海道青少年科学文化財団
理事長　**岸浪　建史**

皆さんお早うございます。北海道青少年科学文化財団理事長の岸浪でございます。よろしくお願い申し上げます。

本財団の名誉評議員でございます彬子女王殿下におかれましては、第４５回記念サッポロ・インターナショナル・ナイトにおいて記念のご講演をお願い致しましたところ、快くお引き受けいただき本日の運びとなりました。先ずは皆さんに、この事をお伝え申し致しますと共に、本日の全参加者を代表して、殿下に心からお礼申し上げます。

先ほど、司会の高校生の方からご紹介がありましたように、彬子女王殿下は学習院大学をご卒業後オックスフォード大学で 5 年間の博士課程を修養され、皇族としては海外の大学から初めて DPhil の学位を取得されました。本日は、彬子女王殿下がオックスフォード大学での御勉学や体験について、高校生の皆さんや各国の留学生など、ご出席いただいている方々にお話しできる機会を設けることが出来、大変有難く思っております。

彬子女王殿下のお父様は、今は亡き寛仁親王殿下でございまして、私どもの財団の発足当初から名誉評議員をお引き受けいただき、本日開催のサッポロ・インターナショナル・ナイトも長らく亡き殿下のご指導を頂きました。その後を継いで彬子女王殿下に名誉評議員として本財団活動にお力添えを頂いております。殿下は、現在、日英協会の名誉総裁や中近東文化センター総裁を始め多くのご公務の他に、子供たちに日本文化を伝えていくため殿下自ら立ち上げられた「心游舎」や、殿下の学者としての研究活動のために京都市立芸術大学の客員教授など多くの大学でご研究をされておられます。

そのようにご多忙の中、本日のご講演が実現致しました。ご出席の皆さんと共に、私もこれから彬子女王殿下のご講演を楽しみに拝聴させていただきます。殿下、どうぞよろしくお願い申し上げます。

御講演者　彬子女王殿下のご紹介

（ご 略 歴）　１９８１年、寛仁親王殿下の長女として生まれる。学習院大学を卒業後、イギリス・オックスフォード大学マートンカレッジにて、在外の日本美術コレクションの調査・研究にあたり、女性皇族として初めて博士号（DPhil）を取得された。

（現　　在）（一社）心游舎 総裁、（一社）日英協会 名誉総裁、日本・トルコ協会 総裁、
（公社）日本プロスキー教師協会 総裁、（公財）中近東文化センター 総裁、
三笠宮記念財団 総裁、（公財）日本ラグビーフットボール協会 名誉総裁、
古典の日文化基金賞顕彰委員会 名誉総裁、京都産業大学日本文化研究所特別教授、
京都市立芸術大学客員教授、立命館大学客員教授、國學院大學特別招聘教授、
千葉工業大学特別教授、同大学地球学研究センター主席研究員、
国士舘大学大学院人文科学研究科客員教授、

（主な著書）「赤と青のガウン―オックスフォード留学記」（PHP 研究所）
「日本美のこころ」（小学館）、「京都　ものがたりの道」（毎日新聞出版）
「最後の職人ものがたり ～日本美のこころ～」（小学館）　ほか。

第４５回記念講演

“海外で日本を学ぶ”

彬子女王殿下

今日は、皆さまにお話しできる機会をいただきましたことを大変うれしく思っております。札幌は私にとっても特別な場所のひとつでございまして、父が札幌オリンピックの組織委員会の平主事をしておられた時に、札幌に住んでいらっしゃったというご縁があり、私も子供の頃からたびたび札幌には来ておりました。札幌にだったらアパートを借りてやってもいいと父も言ってくださっていたこともあり、一時期は数か月に一回くらいのペースで来ていたこともありました。

今日はサッポロ・インターナショナル・ナイトということで、海外に留学しておりました時の経験を少しお話させていただきたいと思います。

私はオックスフォード大学で６年間に渡って留学生活をおくりました。大学２年生だった１９歳の時に１年間。大学を卒業してから５年間です。今では日本文化の継承などに関わる活動を中心にしておりますが、学部時代はスコットランド史を研究しておりました。

タータンといわれる格子柄を使用したスカート状の衣類をキルトといいます。これをよくタータンチェックという言い方を致しますが、タータンチェックというのは和製英語であり、英語では普通にタータンと云います。一枚の布を巻いておりますが、元々一枚のブランケットのような布を巻いていた頃の名残で、それが、時代が下るに従って少しデザイン化されているものです。

スカート状と先ほど申しましたが、スコットランド人にスカートといいますと、すごく叱られます。男の方がお召しになる衣装で、下着を着けずにキルトをお召しになりますが、ポシェットのようなものが付けており、これは回った時にヒラッとならないように押さえているようです。

このテーマを扱うと決めたときは、周りの人たちに随分と心配されました。日本ではスコットランド史の研究者は殆どおりませんし、一次史資料はほぼ皆無、参考文献もなかなか手に入らない状況だったからです。同期の友人には「あなたがタータンの研究をするというのは、英国のウィリアム王子が十二単衣の研究をセントアンドリュース大学でするって云っているのと同じことだよ」と。

このように皆に心配されていた研究テーマでしたが、選んだのには理由があります。きっかけは子供の頃に父に連れて行ってもらった「ハイランドゲームズ」でした。皆様ご存じのとおり英国というのは四つの国に分かれております。イングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドです。国が分かれているうえに、それぞれあまり仲がよくないですね、特にスコットランドとイングランドは。

スコットランドで発行している紙幣を貰ってイングランドで使おうとすると、こんな野蛮な紙幣なんか使えないよといって突っ返されたり致します。

そういった感覚って分り難いと思うんですけれど、スコットランド人としての民族意識の形成にタータンがどのような影響を与えたのかというテーマで、私は卒業論文を書きました。

スコットランドは、北部のハイランドと南部のローランドに分かれています。エディンバラ、グラスゴーがあるほうがローランド、低地地方。アバディーンやダンディーがあるほうがハイランドです。「ハイランドゲームズ」というのは、ハイランド人の「力比べの運動会」のようなものです。このスカート状に短いキルトをお召しになっているのは、ズボンのような長いものを着ていると、ハイランドの山地を駆けまわっているとすぐ引っかかって破けてしまったりするので、こういった短い衣装を身に着けていたわけです。

けれども、イングランドの人たちは、あんなもんは野蛮人が着るもんだ！とすごく馬鹿にしていたんです。スコットランドの中でもハイランドとローランドは仲が悪く、ローランドの人たちはハイランド

の人たちのことを馬鹿にしていたんです。でも、いざスコットランドとイングランドが併合をするということになった時に、ローランド人たちはスコットランド人らしいものを、何一つ持ってなかったのです。今皆様がスコットランドといわれてイメージするものは、このタータンとか、バグパイプとか、ウィスキーとかゴルフとか、いろいろあると思いますが、ゴルフはローランド地方のセントアンドリュースですが、他のスコットランドらしいものは殆どハイランドのものなんですね。

イングランドと一つになるにあたって、スコットランドらしいものを何一つ持ってなかったローランドの人たちが、これをスコットランドの衣装にしてしまおうと着るようになったのが、このタータンです。１９世紀になってからですが、元々は、ハイランド地方の人たちが身に着けていたのです。

このハイランド地方の力比べ運動会のような「ハイランドゲーム」が日本で開催されていた時、まだ初等科だったと思いますが、私は父に連れて行っていただきました。この筋肉隆々の毛むくじゃらの男たちがスカートをはいて丸太やハンマーを投げているという姿に、子供心にすごく衝撃を受けまして、あれはいったい何だったんだろう？と思ったことが結局卒業論文にまで結び付いたということです。

オックスフォード大学のモードレンカレッジで２年間学ばれた父から、私は幼い頃から「おまえはオックスフォードに行くんだ。おまえはオックスフォードに、」と、呪文のように聞かされ続けて育ちました。そのおかげで私も子供心に、ああ大きくなったらオックスフォードに行くんだろうなと、おぼろげながら思っていた訳です。高等科時代に、学習院大学とオックスフォード大学の協定入学の制度があることを知り、徐々に夢が現実に近づいて行きました。そして私が通ったのがオックスフォード大学マートンカレッジで、今の陛下が行かれていたカレッジで、私もここに住んでおりました。
１９世紀の建物なのですごく寒いんです。石作りで、特に冬場、クリスマスの休暇を終えて帰った時とか、お正月が明けて帰ると、取り敢えずコートを着たままで小さくなって部屋が温かくなるのを待つというくらいとても寒いところでありました。

留学１年目の学部生でのオックスフォード大学の講義は自主参加なので、自分が必要だと思えば出ればよく、出席したと認められる授業は「チュートリアル」という、先生と１対１でやる授業だけなんです。このチュートリアルについては、後ほど詳しくお話ししたいと思います。

１年間の留学をしていた時、私のマートンカレッジの学部生は、３学年合わせて約３００人在籍していました。物理、化学、医学、歴史、言語学、法律、政治、音楽など様々です。

オックスフォードでは殆どの学生が毎日食堂に集まります。繋げると１０メートルを超える長テーブルが３列あり、空いた席に適当に座るというシステムになっておりますので、留学して１年も過ぎるころには自分の専門とは関係なく、殆どの人の顔が分るようになり、異分野の友達が沢山出来ました。

日本ですと学部学科毎に纏まっていますので、サークルにでも入っていない限り他学科の人と会う機会、話す機会は中々ないと思います。でもオックスフォードでは空いた席に色々な人が毎日代わる代わる座ってくるのです。前に座った人と、「僕は音楽専攻の ***** だよ。初めまして」という所から会話が始まったりします。特に自分が何をやっているのかという話をきちんとしないといけないんですね。

物理の人でも数学の人でも、今自分がどのような研究をしているのかということを、自分と関係ない分野の人にも分かり易く説明をするということにみんな慣れております。専門じゃない人に分かり易く説明出来なければそこで会話が終わってしまいますから、会話を滑らかにしていくためにも相手に分かり易く、みんなが話してくれるのです。

私の研究も、こんなことをやっていると云うと、それはどういうことなの？と聞いてくれたりしますので、相手にきちんと分かって面白いねと思ってもらえるように話をするというのをこの食堂で私は学んだと思っております。理系の人たちが、ケーキをどうやったら７等分とか１１等分に分けられるかということで、みんなが議論を始めたりするので、私は全く分からないんですけども、こういうことがテーマになるんだ、日常のことが数学になるんだなというとも知ることができて面白かったです。

当時のマートンカレッジの学部生は、日本人は私一人だけでした。日本に関する問題は政治、経済、歴史、文学などジャンルを問わずすべて当然のごとく彬子に聞けということになります。日本にいた時

は、それはちょっと専門ではないので分かりませんと言えたことが、英国では自分の国のことなのになぜ分からないのかと言われてしまいます。聞かれた質問で私にはよく分からないことも少なからずあり、私は自分がいかに日本という国について知らなかったかということを思い知らされました。

英国に留学して思ったことは、英国人がよく自分の国の歴史や文化について知っているということでした。向こうでは理系であっても、シェークスピアの話になるときちんと話ができる人たちがたくさんいます。オペラやクラシックのコンサート、バレエ鑑賞などに日常的に出かける人も多くいます。日本人で外国の人たちに対して源氏物語の話をできる人がどれだけいるでしょうか。

私はオックスフォードで、日本文学の高名な研究者であり、東日本大震災の後、日本国籍を取得されたことでも知られているドナルド・キーン先生に、源氏物語の魅力とその歴史的な意義について長時間にわたりご説明を受けたことがあります。外国の方が日本の国の文化と歴史について愛情込めてお話下さり、私はそれをうなずきながら聞くことしかできなかったことを、とても恥ずかしく思いました。それと同時に自分が日本人であるということも、留学して初めて実感しました。

日本にいる間は周りが殆ど日本人ですし、いわゆる外人の方が異質な存在です。取り立てて自分が日本人だと意識することは殆どありませんでした。でも英国の地では、日本人の自分が外人になります。英国人ばかりではなく世界の様々な国の人たちと知り合えたことで、文化や言葉、習慣の違いを肌で感じることが出来ました。その一方、現代のような情報化社会にあって日本人は皆お寿司が握れるとか、忍者が存在するとか、いわゆるフジヤマ、ゲイシャ、侍のような前時代的な偏った日本のイメージがまかり通っていることにも驚きました。そんなこともあり、日本の代表として、きちんと日本のことを勉強し正しい知識を持って海外の人たちに伝えていきたいという気持ちが芽生えて来たように思います。

この頃マートンカレッジの学長で、中国美術史（考古学）の大家であるジェシカ・ローソン先生が、日本美術で、先ほどお話しした「チュートリアル」を自分としませんかと声を掛けて下さいました。チュートリアルというのは、オックスフォードとケンブリッジ独自の授業形態で、前の週に指導教授からお題を出されてそれについてエッセイ、小論文ですね、を書いて授業の時に先生の前で読みあげ、それについて先生と１対１で、時々学生が増えて２対１とか３対１になる時もありますが、少人数で議論をするというものです。毎週二つのチュートリアルを抱えている人もいましたし、８週間の学期が終わるころには精根尽き果てるくらいの厳しさです。

オックスフォードは１学期が８週間で３学期合計２４週なんです。１学期が８週間ってすごく短いなって思っていたのですけど、いざやってみますと８週間が限界、ということを、身をもって実感致しました。ご想像出来るかどうか分かりませんが、エッセイ、日本の大学でいうレポートみたいなものを、Ａ４の紙に３枚くらい書くんですが、それが毎週あるんですね。お題を持ち帰っていろんな資料を調べて、組み立てて小論文を書いて、チュートリアルが終わって、「ああ、これでようやく終わった！」と思ったら次のお題が出される、というのを８回繰り返されるので本当に大変です。私は週に１回だけでしたが、１学期に１０回とか、１週間に２回のチュートリアルを抱えている人たちはざらにいましたので、私がたった一つでヒイヒイ言っているのは情けないんですが、やはり母国語でもない言葉で毎週やり続けるというのは本当に大変なことした。

特に学長のローソン先生はすごく厳しいということで有名な方でしたので、チュートリアルをやりませんかと言って下さった時は、多少の不安はあったのですが、ちょうど日本のことについても学ばなければならないと思っていた時期でもありましたので、挑戦することに致しました。

その２回目の授業の時であったと思います。浮世絵がその日のテーマでした。皆さんよくご存じと思いますけれども、浮世絵というのは日本の江戸時代、１７世紀後半から１９世紀くらいにかけて流行した風俗画で版画であります。ゴッホやモネなど印象派の画家にも影響を与えたということで知られていますね。この浮世絵がテーマだった時、ローソン先生から私は「そもそも浮世絵というのは、どのように観るのか、どのように鑑賞するものなのか」という質問をされました。当時スコットランド史を専攻していた私では、その答えを即座に返すことはできませんでした。そんなことを考えたこともなかったからです。

西洋では絵画や版画というのは、壁に飾るということが前提に作られます。よい絵を飾っておくこと

が自らの富と権威を示すステータスシンボルとなり、一度飾られたら余程の事がない限り取り換えられることがありません。その反面、日本の掛け軸や屏風は、季節や来客によって取り換えられるものですし、絵巻もしまってあったものを楽しむものです。浮世絵に至っては、現在でいう雑誌のようなものでアイドルのポスターのような感覚で壁に貼ることがあったかもしれませんが、基本的には折に触れて取り出して観ていたものでしょうと、今の私なら答えていたでしょう。

東洲斎写楽の「三世大谷鬼次の奴江戸兵衛」という作品がございます。当時すごく有名だった歌舞伎役者のいわゆるブロマイドみたいなものですけれど、当時の人たちは写楽の浮世絵などが、現在のように東京国立博物館のガラスケースの中で鑑賞されるものになるなんて、まったく想像してなかったと思いますね。このように、西洋と日本では美術品に対する考え方が根本的に違うということ、そして西洋人が日本美術を観る目と日本人が日本美術を観る目が異なっているということを、この授業を通して実感しました。そして現在ですらこのように違うのであれば、日本美術に初めて触れた昔の外国人たちは日本美術をどのように観ていたのかということに興味が湧いてきました。そして、二度目の留学の時は大英博物館の日本美術コレクションの形成の歴史を通して、英国人の日本美術に対する理解や意識がどのように変わっていったのかということをテーマに、博士論文を執筆しました。

このようにお話ししていますと、とても順風満帆にここまで来たようにお感じになられた方もおられるかもしれませんが、実際はそのように生易しいものではありませんでした。

最初にぶち当たったのは英語の壁です。皆様から「英語のご苦労というのはご皇族の方にはないでしょう」と云われることがあります。これが大きな勘違いでありまして、恥ずかしながら高等科までの私の英語の成績は本当にひどいものでした。父も英国に行かれていましたので、子供のころから外国のお客様はよく家に来られていましたし、その方たちとお話ししたいという気持ちは少なからずあったので、初等科の頃から英語の教室に通って英語は割と身近なものではあったと思います。

その私が英語につまずいたのは中等科の時でした。原因は英語の授業のテキストとして使った、アンデルセンの「みにくいアヒルの子」です。その時の英語の先生は我々にこのテキストを暗記暗唱させたのです。シェークスピアの一節を暗記するとか、徒然草とか平家物語を暗唱するということであれば、それは古典的なことで意味があるなと納得出来るのですが、これはデンマーク人の作家アンデルセンの、原文でもない英語翻訳文で、この文章を丸暗記しなければならないことの意義を、当時の私はどうしても見いだすことが出来ませんでした。

それ以来、英語の授業が大嫌いになりまして成績順に分けられる英語はいつも上のクラスと下のクラスを行ったり来たりして、英語の授業は本当に始まった時から早く終わらないかなと思っているダメな生徒でした。

それでも子供の頃からの刷り込みの成果なのか、オックスフォード大学に留学したいという夢は変わりませんでした。英語の授業が嫌いだっただけで英語事体が嫌いなわけではなかったのだと思います。大学に入ってから自分の意志で通い始めた英語のレッスンはとても楽しく、学習院大学と単位互換の交換留学制度があったオックスフォード大学マートンカレッジにビジティング・スチューデント、聴講生として留学する資格を得ることができて、２００１年の９月に英国に向かって出発し、到着後、２か月間現地の英語学校で英語を学びました。

ここは日本人のための学校でしたので、生徒は日本人ばかり、私は中でも出来る方でした。英国人の

先生とはきちんと会話は出来ていました。でも１０月になって、オックスフォード大学に入学しクラスメートと話してみて愕然としました。６割がた何を言っているのか分らなかったのです。私が入ったのは１年生の学年だったのですが、その８割が英国人で残りの２割も英語を母国語並みに話せる人ばかり。私のように中途半端な英語しか話せない学生は他に一人もいませんでした。英語学校の時の先生は本当にゆっくり分かり易い言葉で話してくれていたということがその時分ったのです。会話が全て自分の頭の上を飛び交っていきます。時々私に話を振ってくれることもあるのですが、会話に全くついていけないので返事をすることも出来ませんし、答えても的外れなことばかり言ったりします。「まあ彬子に聞いても仕方ないか」と思われて、終いには話さえ振って貰えなくなりました。私はどんどん孤立することになりました。授業に出ていてもチンプンカンプン。友達と話していてもチンプンカンプン。というつらい日々が続きました。

でも１２月初旬に最初の学期が終わり、成人の行事の関係で、私は日本に一時帰国をしたのですが、そこからある変化が起こりました。１月になってまたオックスフォードに戻りしばらくたったある日、何だかいつもと違うということに気が付いたのです。昨日まで殆ど分からなかったのに突然みんながしゃべっていることが理解出来るようになっていました。雑音でしかなかったテレビやラジオのニュースが素直に耳に入ってきます。

日本を出る前に父が、英語は３時間３日３か月３年という３の周期でうまくなるものとおっしゃっていたのを思い出し、１月でしたので９月から数えて３か月たって１月、ああ３か月目に本当に分かるようになったということが分かったんですね。何故３の周期でうまくなっていくのか理由はよく分かりませんが、友人の留学経験者も分かる、分かると、そのくらいから楽になるよというように言っている人がいますので、いわゆる留学あるある、なのだと思います。

ここからは少し勉学と研究生活についてお話ししたいと思います。一度目の留学の期限は大学在学中でありましたので、１年間でした。実際に過ごしてみて良く分かったのですが、１年間の留学生活というのは本当にあっという間です。最初は、渡される膨大な量の参考文献リストを全部読まなければいけないのだと途方にくれて、頭から煙が出ているようなこともありましたが、途中からは前の学生がその本に、まあ本当はダメなのですけれども、引いてあるアンダーラインのところを拾っていくと、エッセイを書くために必要なことが分かるということも分りました。ポイントとなるところを読んで流し読みをする技術を学びました。英語を話すことにもようやく慣れて、こんな感じでやればいいんだなというペースを掴みかけた所で１年間のタイムリミットが来てしまいました。留学当初に比べれば英語は上達したとは思いますが、だからといって英語が自信をもって話せますと云えるようなレベルではありませんでした。

英語でのエッセイの書き方もディスカッションの仕方も資料の調べ方もお友達付き合いも、あともう一歩踏み込むところまでは届かなかったというのが実感でした。ビジティング・スチューデントだった私は、他の同級生たちが必死に取り組んでいた試験も受けなくてよかったので、ある意味気楽ではあったのですが、オックスフォードの学生ならば普通に経験しなければならない苦しみを知らないで、オックスフォードに留学して来ましたというのは、努力している同級生に対して何だか申し訳ない気持ちになりました。このままでは全てが中途半端で不完全燃焼のまま終わってしまうような気がし、新しい研究テーマについての興味もむくむくと膨らんでいた

時期でもありましたので、もう一度オックスフォードに戻って、正規の学生と同じように苦労をして大学院できちんと学位を取りたいという思いが強くなっていきました。

先ほど、一度目の留学をした時のジェシカ・ローソン先生の浮世絵の授業をきっかけに、美術品に対する考え方が西洋と日本では違うということに気づいたという話をしましたが、我々日本人が日本美術を観る目と外国の方たちが日本美術を観る目というのが全く違うということも分かりました。このような経験から、情報が瞬時に世界中を行き交う現代ですらこんなに違うのであれば、日本美術に初めて出会った外国人は、日本美術をどのように観ていたのだろうかということに興味が湧いてきました。

一度目の留学期間をほぼ終えて、日本に帰る少し前にローソン先生にご挨拶をするために、学長室を訪ねました。日本の大学を卒業したらまたオックスフォードに帰ってきて、このようなテーマで日本美術を勉強してみたいという相談をしましたところ、ローソン先生はニャッと笑われて「それは面白そうなテーマだから、あなたの指導教授になってあげましょう」と言って下さいました。ただ、ローソン先生は、日本美術は専門ではありませんでしたので二人目の指導教授として、日本美術の専門家を紹介してくれました。連絡するように言われたのは、大英博物館の日本セクション長であるティム・クラーク先生です。ローソン先生はマートンの学長になる前に、大英博物館のアジア部の部長を務めておられましたので、クラーク先生とは旧知の仲であったので頼みやすかったのだと思います。

クラーク先生とは博物館の日本ギャラリーに隣接するスタディルームでお会いすることになりました。私が研究したいテーマについて、たどたどしい英語で何とか説明を終えると、すぐに「それだったら大英博物館のアンダーソン・コレクションを扱ってみたらどうですか。外国人の作った日本絵画コレクションとしては最も古いものの一つだけれども、今まで殆ど研究されていないし、貴方の研究テーマにも合うと思いますよ」と云われて、ある作品を私の目の前に掛けて下さいました。これが私の博士論文の中で重要な役割を担うウイリアム・アンダーソンとの出会いでした。

思えば、この時に見た作品に私は魅せられてしまったのだと思います。西山芳園という殆ど知られていない円山四条派の絵師が描いた「虫行列」の絵です。様々な虫が草花を大名行列の道具に見立てて歩いている、お籠の周りに、お提灯を持っていたり、槍を持っていたりするのを見立ててあるんですけれども、派手さもなければ驚くような技術を使って描かれたような作品ではありません。でも私はこの作品に惹かれてこの作品を見いだしたアンダーソンという人物に、急激に興味が湧きました。

私の指導教授のジェシカとティムのお二人は、性格が正反対なんですね。ジェシカが陽ならティムは陰だし、太陽と月、積極的と消極的、大胆不敵と冷静沈着のような感じで、とにかく正反対なんですけれども、なぜこの二人がぶつからずに上手く行くのかなと不思議に思っておりましたが、お互いの領域を侵さずに適度な距離感をとって付き合って下さるので、とても有難かったです。

ジェシカは気難しい性格ではないんですけれども、機嫌のいい時と悪い時の差がすごく激しい方でありまして、ご機嫌斜めの時は本当に恐ろしくて、そのまま踵を返して帰りたくなるんです。自分の学生でない先生方でもジェシカ・ローソンを恐れている人はたくさんおりまして、実際ローソン先生の学生だというと「I'm sorry それは大変なことだね」とすごく同情されましたし、博士論文をもうすぐ書き終わるんですと話をすると、真剣なまなざしで「How? どうやって５年で終わるんだ」と云われたりしました。ジェシカの学生で１０年近く博士課程をやっている人たちもいましたので、５年で終わろうとしている私は、どうやら早い方だったらしいということを知りました。

ティムは逆に、大英博物館の方ですごく忙しい人なので、見てほしいと論文を送っても、ぎりぎりになるまで見てくれない。ティムが見てくれないので、もうこのまま出しますというと、ちょっと待って！と云ってすごい勢いで一日半ぐらいでみてくれて、そしてすごく丁寧な英語に直してくれるんですね。私はやはり日本人なので、日本語を直訳するようなぎこちない文章になってしまうことがあるんですけれども、ティムが見てくれると、ああ、私が言いたかった事はこういうことと、すごくきれいな英語に直してくれるんですね。本当に有難かったです。ジェシカは論文の構成を中心に、ティムは専門的な内容を中心に、役割分担をしてくれたんですが、とにかく二人とも厳しい人だったので、何度も胃を壊しました。

ストレス性胃炎です。博士論文も書き終わらない限りこのストレスが無くなる事はありません。特にジェシカは日本美術が専門ではないので、専門ではない人に分かり易く説明しなければならないんですね。日本人だったら織田信長とか豊臣秀吉と言ったら、ああ信長と秀吉ねってサッと読み流してしまいますけど、ジェシカは織田信長も豊臣秀吉も知らないので、論文を書いて出すと「Who are they?」誰これ？って書かれて戻ってくるんです。だから「戦国時代の有力武将である織田信長は、」とか、一文付け加えるんですけど、結局そうした指導によって、専門じゃない人が読んでも分かり易く説得力のある論文を書けたと思います。

この二人の指導教授のお陰で、納得のいく博士論文を書くことが出来ましたし、自分の研究しているテーマについて分かって貰うように話すというのは、とても良いトレーニングになって、私が今こうやって講演をしたりとか、文章を寄稿したりするときに大変役立っているなと思っております。この留学生活はこのお二人無しでは終わらなかったはずですし、良き師に巡り会えたということが私の一生の財産になっているなと思っております。

留学をして研究をしながら私が感じたことは、明治の日本はすごかったということです。個人的には、私より前に留学をしてきた先人たちに思いを馳せずにはいられません。私はインターネットが普及してから英国に行きましたので、ちょっとした分からない事はすぐインターネットで調べることが出来ました。論文には人物の生没年を書かなければいけないのですが、インターネットで調べれば、どんなにマイナーな人物であっても大体一つか二つヒットして判明しますし、どんなに朝早くても夜遅くても調べることが出来ます。

でも、インターネットが無かった時代というのは、まず図書館が開いている時間に図書館へ行って、人名辞典を調べてそれに載っていなかったら別の資料を探さなければならない。すごく手間がかかるわけですね。それを私はパソコンでパチパチしながら論文を書くことが出来ましたけれども、当時の人たちは全部手で書いて、書き直したいことがあったり、ここは文章を入れ代えたいと思っても、もう一度書き直さなければならず、ものすごい手間と時間をかけて論文を書いてらっしゃったんだと思います。

さらに明治時代に留学した人たちはどうでしょうか。幕末に長州藩からヨーロッパに派遣されて、ロンドン大学のユニバーシティーカレッジで学んだ長州五傑、長州ファイブと呼ばれる人たちがいます。井上聞多、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔、野村弥吉の５人です。井上聞多は後の井上馨、伊藤俊輔は伊藤博文です。

１９世紀半ば産業革命によって富強を遂げた欧米諸国が東アジアに進出するようになり、日本を取り巻く環境は大きく変化しました。特に日本は、嘉永６年ペリー来航後、開国か攘夷かで大きく混乱しました。その混迷が続く文久３年、長州藩は下関海峡を通過する外国船を次々と攻撃し攘夷を決行します。その一方で長州藩は攻撃した２日後、５人の若い藩士を横浜港から密かに英国へ勉学のため派遣しました。彼らは国禁を破って命懸けで密航し、日本人で初めてロンドン大学に留学を果たしたのです。

外国の侵略から日本を守るために外国を打ち払うことを攘夷と云いますが、この攘夷の実現には、欧米の最新の知識と技術を学ばなければならないと考えて彼らは海を渡りました。ところが英国に到着すると、日本と英国の国力があまりにも違うということに気付いて、攘夷は不可能であると悟ります。彼らは攘夷を捨てて開国主義へと転じ、欧米の近代文明を積極的に学んで日本を強い国へ発展させようと決意したわけです。この時行った長州ファイブの人たちが学んできたことはこのような事です。

伊藤博文は後に内閣の父と云われていますが、日本の工業化の礎を築き明治憲法の発布に尽力しました。後に外交の父と云われる井上馨は欧化政策を進め鹿鳴館時代を作り、山尾庸三は工部省の設置に尽力するなど工業の父と云われ、遠藤謹助はお金を印刷することを学んで造幣の父と云われています。井上勝も留学から帰国後に、新橋横浜間に日本初の鉄道を開通させるなど鉄道の父と云われました。

二十歳そこそこで海外へ渡って行き ABC も分からず、東洋人蔑視の世界観の中で生きていくというのは、並大抵なことではなかったと思います。そんな中、彼らは英語を学んで、西洋のマナーを身に着け、それぞれ外交や工学や造幣技術などを学び、日本へ持ち帰り広めました。

６年間の留学で七転八倒していたわが身を恥ずかしく思った私でございますが、自分たちが学んだことが日本の未来に繋がると信じて様々な技術を身に着けられた先達たちの残した功績を心に留めて、私

も海外に学んだものの一人として、日本の方たちに何かお返しがしていけるように今後とも努力していきたいと思っております。

今日出席されている皆様の中に留学を考えていらっしゃる方がたくさんおられるかと思いますが、ぜひ夢を実現して行っていただきたいなと思います。海外に出てみると世界観が変わります。自分が如何に井の中の蛙だったかを実感します。そして海外に出られたら、自分は日本という国を背負っている日本の代表なんだ、ということを忘れないでいただきたいと思います。

海外では、いろんな人たちと出会うと思いますけど、その方たちにとっては貴方が生涯で、最初で最後に会う日本人になるかもしれません。と云う事は、貴方が言った事が、その外国の人にとっては、「あの日本人が言っていた事」ということになって、日本を背負ってしまうことになるのです。もし、暴れたり事件を起こしたりすると、「日本人は野蛮だね」と思われて、一人がやった事によって全部の日本のイメージが悪くなってしまったりします。逆に、あのような良い日本人がいるんだから、きっと日本は良い所かもしれないって思われる。一人の行動でも、全ての日本のイメージを決定づける可能性があるということを心に留めながら海外で生活して欲しいなと思います。

今はグローバル化の時代で小学校でも英語を教えるようになりましたが、日本語が話せないと英語もきちんと話すことも出来ません。先ずは日本語をきちんときれいに話すこと、そして日本を誇りに思うこと。日本というのはこんなにいい国なんですよ、自分は日本の国の代表として日本の魅力を海外に伝える役割を持っているんだということを忘れずに、それを説明できるような人であっていただきたいと思っております。

本日は長時間に亘りましてご清聴有難うございました。

お礼のご挨拶

サッポロ・インターナショナル・ナイト実行委員会
実行委員長（北海道大学副学長）　横田　　篤

彬子女王殿下、本当に素晴らしいご講演有難うございました。ご経験に基づく詳細なご留学の体験をご披露していただきまして、私も、何か自分が留学をしていたような体験を感じまして、特に海外留学を経験したいと希望する高校生の皆さんは勇気が湧いてきたんじゃないかと思うところでございます。

お話しを聞きながら、私はやっぱり、日本ことをよく知らなければならないと痛感致しました。私は短期間でしたが家族とオランダで過ごしたことがありました。しかし様々なところで日本人として恥ずかしい思いを致しました。例えば、近所で盆栽をやっている方がおられまして、日本人なら盆栽のことは知っているだろうと、「この枝の曲がり具合はどうだ？」と言われても、すみません分かりませんとしか言えないんですね。またオランダには、戦後最初の東京オリンピックで金メダルを取った柔道のアントン・ヘーシンクという方がおり、柔道は盛んですが、日本人はみんな柔道をやっていると思っているんですね。お前の帯は黒か？と言われまして、すみません、柔道はやっていませんと。

ただ自分の名前を漢字で書いてくれと、ヘレンという方だったので、平らに連なると書いたら、どうゆう意味だ？というので、ピース・アンド・ユニティ（Peace and Unity）と説明したらすごく喜ばれまして、少しは役に立ったかなと思いました。

浮世絵のお話がございましたが、ヴァン・ゴッホのゴッホ美術館に行ったときに、私はそこで初めて「浮世絵」を見ました。外国で日本の伝統的な絵画を拝見した体験を思い出し、今日の彬子様のお話に私は大変共感を覚えました。

最後に長州ファイブのお話もいただきましたが、私は学生の頃、井上育英会という民間では一番長い歴史のある育英会の奨学金を頂いておりました。井上馨公の資産を基に若い人たちにお金を差し上げている団体で、私は今、この育英会の北海道支部長を務めております。今日はその井上薫公をご紹介頂き、改めて功績を確認したところでございます。

高校生の皆様には、幕末から明治維新への大きな時代の変換期に、太平洋の荒波を超えてロンドン大学への留学を果し日本の近代化を牽引した先人の心を継いで、ぜひ海外へ目を向けて留学を志し、大きく羽ばたいていただきたいと期待しております。
本日は彬子様のご講演、本当に有難うございました。心からお礼申し上げます。

The 2nd Part（第２部）：Let's aim for the world!

（Venue）Kaderu2･7 / Eminence Hall（Keio plaza hotel Sapporo）＜12:30~15:00＞

Group A.	アジア・オセアニア（Asia / Oceania）	Kaderu 2･7
Group B.	ヨーロッパ・アフリカ（Europe / Africa）	Kaderu 2･7
Group C.	北米・中南米（North America / Latin America）	Kaderu 2･7
Group D.	世界選抜（The five countries in the world）	Keio plaza hotel

Group A Asia / Oceania

Nepal・Australia・Kazakhstan・Cambodia

Coordinator：Canbul Ozge（Turkey・Graduated school at Hokkaido University）
Assistant：小野 彩花（札幌開成中等教育学校）／堤 花音・佐々木 真那（札幌国際情報高校）
Adviser：陳 堯柏 (Chen Yao Bo・台湾・札幌国際大学講師）／今野 美香（国際ソロプチミスト札幌）／小倉 悦子（北大学生ボランティア相談室）

Nepal

Speaker：Sadashankar Rinkey（札幌国際大学）

Introduction of Nepal

- The flag of Nepal is the only flag in the world withtriangle shape.
- Nepal is a landlocked country surrounded by mountains which borders with India and China.
- The cuisine of Nepal include : Momos,Dal Bhat, etc.
- Presidential residence and office is called Shital Niwas and located in the capital,Kathmandu.
- There are many Buddhist and Hindu temples.

Australia

Speaker：Ashleigh Dollin（北海道大学大学院）

Introduction of Australia

- Australia celebrates Chistmas in summer.
- Australia is the smallest continent but the largest island in the world.
- Australia has many deadly animals.
- Australia has a very dierse climate and culture.

School Life:
Ditters per state
NSW:Kindergarten to year 10(4.5 to 5.5 years old to 15.5-16.5) is compulsory
Year 11-12 higher school certificate or TAFE or full-time employment until 17 years old
University/Tafe/Apprenticeship: Choose a course that suits your intended career path

Kazakhstan

Speaker: Aituar Tulipkaliyev ＜北海道大学大学院＞

The content of my presentation included general facts, culture, festivals, traditions, education, souvenirs, tourist places in Kazakhstan, as well as tips for learning English and SDG.

I said that Kazakhstan is the 9th largest country in the world and that most people living in Kazakhstan speak Kazakh, Russian, English. I also talked about the traditional event as Nauryz - the new year of the Turkic peoples. I told and showed photos of the most beautiful and interesting tourist places in Kazakhstan, such as Baiterek, Akhmet Yassawi's, Mosque, Kaindy Lake, the central mosque of Astana, etc. Regarding SDG, I gave an example of the EXPO 2017 exhibition, the theme of which was green energy and green technologies.

As for tips on learning English, I advised you to watch videos, movies in English and not be afraid to make mistakes when speaking in English. I tried to convey the most important information about Kazakhstan in the most interesting and interactive way possible by asking questions during the presentation.

My presentation was in English, and I was very surprised by the level of English proficiency of the students, as they actively participated in the process of answering my questions and demonstrated a complete understanding of the content of my presentation. I was also surprised that the students did not hesitate to ask a lot of interesting questions in English. I was also very pleased with the organization of the event, as all the instructions were clear and clearly formulated.

Cambodia

Speaker: Heng Chikhoueng （北海道大学）

カンボジアは東南アジアに位置し、日本から飛行機で６時間半ぐらいかかります。首都はプノンペンであり、公用語はクメール語です。学校はカンボジアでは授業が一般的に７時に始まり、遅くて１７時に終わります。そして、カンボジアの学校では部活が設けられていないことは日本と違うところの一つです。

カンボジアの有名なアンコールワットは１２世紀末に完成されたヒンドゥー教最大の寺院であり、２００４年世界文化遺産に登録されました。早朝の美しい景色、当時の建築の素晴らしさ、まだ解明されていないアンコールワットの建設の謎などがアンコールワットの魅力です。

季節では、日本のような四季はなく、一年中はほとんど暑いため、自然の変化を楽しむことができないのは残念なことです。日本に来て、春の桜、秋の紅葉、冬の雪などを体験できてうれしく思います。質問タイムにカンボジアの有名な果物について質問されていた。「サッポロ・インターナショナル・ナイト」に参加することで多くの留学生および日本人と交流できる貴重な経験を得ることができて、うれしく思いました。

《Group Outline　Coordinator：Canbul Ozge（Turkey）》

In Group A, which consisted of countries from Asia and Oceania, we had presentations from Australia, Cambodia, Inner Mongolia, Kazakhstan, and Nepal. The presentations were shaped under three main themes: we moved onto the introduction of our speakers' respective countries, differences or similarities between Japan and their home countries, and finally, any tips they might have for the prospective students regarding learning English and advancing their language skills.

During the presentations, we had the opportunity to talk about and compare the customs, cultural elements, and educational systems, especially regarding secondary and higher education; for instance, in Cambodian high schools, classes start at 7:00 but finish at 17:00. Additionally, while Japan experiences four seasons throughout the year all across the country, Cambodia only has two seasons, dry and wet. While there are quite a few similarities concerning the lifestyle of high schoolers and university students between Australia and Japan, club activities are taken much more seriously in Japan; however, they are mainly viewed as fun extra-curricular pursuits in Australia. We learned about Inner Mongolian traditions, festivals, and cuisine, as well as how Japanese train stations are much larger than Inner Mongolian stations and include so many facilities. Through the presentation about Kazakhstan, we got a glimpse of its beautiful nature and cuisine. Also, we learned that while it is officially a bilingual country, English can also be considered the third language, unofficially, as it is used widely in many socio-economical areas. We learned that the flag of Nepal is the only flag in the world with a triangle shape, and Nepalese architecture usually fuses traditional and modern elements. Yet, the architecture of the Buddhist temples in Japan and Nepal is quite different.

Lastly, all our speakers agreed that consuming authentic media, via reading and writing, in English is as important as practising productive language skills, writing, and speaking, and it is crucial not to be afraid to make mistakes and use every chance to practice as much as possible.

「My Impression（As Coordinator）」Canbul Ozge

As a coordinator, it has been an amazing experience and a privilege to be a part of the 45th Sapporo International Night. While it was my first time acting as a coordinator, I am genuinely grateful for the opportunity and thankful to have worked alongside the fantastic team, which was Group A. Hence, I would like to extend my gratitude to our Speakers, Assistants, and Advisers once again. Although we were slightly plagued by a series of bad luck, including accidents and Covid-19, through everyone's perseverance, Group A managed to deliver excellent presentations. I hope that for all the participants and the audience, especially the high school students, the event was as unforgettable and wonderful as it was for our group.

Adviser, Yao Bo Chen (Sapporo International University)

Year 2022 marks the 3rd year into global coronavirus pandemic, and new confirmed cases are still being reported on a daily basis. Notwithstanding all the difficulties and uncertainties, the 45th Sapporo International Night was once again a huge success. The event itself is remarkable for its multinational, transcontinental nature. In this event, joined by so many local and international students, we were able to share different thoughts on education system, culture and other aspects of our life. More importantly, we welcomed Princess Akiko of Mikasa as our keynote speaker, and her highness enlightened us by sharing a glimpse of her overseas experiences and introspection. I was very touched by her inspiring and intellectual sense. Overall, this event undoubtfully has brought everyone an unforgettable experience that will deeply influence us for many years to come.

Adviser 今野 美香 (国際ソロプチミスト札幌)

まず、コロナ禍のため形を変えながらも継続し続けているインターナショナルナイトに、大いなる意義を感じたい。参加する若者達が、このイベントを通して、どれだけ開眼されるか、実際の交流を通して実感している。更に、今回は彬子女王殿下のご講演があり、それに感銘を受けた高校生の姿が強く印象に残っている。「感動した。」「胸に響いた。」など、それは高校生から自然に発せられた偽りの無い言葉であった。勿論、海外で質の高い学問を収めるには、高額な教育費がかかる。しかし、現代では、日本でも無返還の奨学金が増えているので、自分の努力で勉強する道を探し出すことができる。その勉強したいという思いを高校生に与えたご講演に、私は感謝の念を抱いたのである。

グループの活動では、コーディネーターが中心となり、皆をまとめ、当日の成功に導いた。色々ハプニングもあったが、それを乗り切れたのは、この活動に参加した若者達の力によるものである。今後も自分自信の勉強にもなるこの活動が続くことを願うばかりである。

Adviser 小倉 悦子 (北大学生ボランティア相談室)

「カザフスタンはどこ？オーストラリアのお正月は４月？」等のアイスブレイクのクイズが始まると、高校生の皆さんは生き生きとした表情になりました。４人のスピーカーさんからは、各国の文化や教育そして、日本に来た時に感じたカルチャーショック等について発表がありました。司会の高校生も質問する皆さんも英語でトライし、諸外国への関心の高さやの海外で学ぶことに対する期待や希望を感じました。第３部の全体発表では、当日コロナで欠席したモンゴルの発表を別の高校生が代理で努めました。情況に応じて対応する姿に力強さを感じました。高校生の発表は具体的でその国を旅しているかのようにさえ思いました。臆することのない堂々とした姿も印象的でした。コロナ禍の中、万全の予防対策をして、対象を高校生に絞って実施。目に見えないご苦労の中、今年度もこのように開催して下さった事に深く感謝すると共に繋げていく大切さを実感いたしました。有難うございました。

Assistant　小野 彩花（Ayaka Ono・札幌開成中等教育学校）

In our group, speakers introduced the differences between Japan and their countries. Through this comparison, I was able to learn about the positive and not-so-positive aspects of Japan that I had not noticed before. I felt strongly that I need to deepen my understanding of Japan, and become able to explain about my country well to others when I go abroad, like the speakers.

In addition, while communicating with international students in Japanese, I realized that the Japanese I normally use is quite vague. For example, the subject may be missing, sentences may be long, particles may be wrong and so on. Such sentences are understandable to those born and raised in Japan, but difficult to understand for those from overseas. I found that, in our globalized world, we need to reconsider our style of communication. I'd like to continue to think about what kind of language is easy to understand for people learning Japanese and what is important when communicating with people from different cultures. It was really fun to talk with many people, including teachers and international students. Thank you very much.

Assistant　佐々木 真那（札幌国際情報高校）

今回イベントの運営側として活動できたことは初めての経験でしたが、グループの方にサポートしていただいたり、逆に私ができることで他の方のサポートができたりと、ただ参加しただけでは得られない達成感も得られ、とても良い経験になりました。また、北海道にいらっしゃる留学生の方々と実際に英語を使った会話ができたのは私にとってとても貴重な経験でした。また、準備期間中のグループメンバーの方々とのやりとりでプレゼンでは伝えきれなかったそれぞれの方の国についてより深く知る機会もありました。国の歴史や土着の風習など、興味のあることについてお聞きできたのはもちろんですが、現在国が抱える難しい問題についても話題に上がり、新たに興味を持つようになりました。そこから学校での総合探求の時間での自分のテーマが決まり、話をしてくれた方の意見も思い出しながら学習を続けています。今回同じグループになった皆さんとはイベントの後も連絡を取り合い、お話できています。また機会があればぜひ参加したいと思っています。

Group B EUROPE / AFRICA

Cabo verde・Egypt・Belgium・Czech・Italy

Coordinators：鶴田 和大（札幌国際大学）
／ Rahman Sadniman（Bangladesh・Graduate Student at Hokkaido Univ.）
Assistants：三好 菜乃 (北星学園女子高校) ／ 佐考 琉菜・佐々木 那奈（札幌藻岩高校）
Advisors：小林 智佳子（AFS 札幌) ／ 林　祥史（ 北海道科学大学高校）

Coordinator　鶴田和大 (札幌国際大学)

私たちのグループの発表テーマは、５か国の違いを比較しやすいように同じテーマに統一しました。お祭り、教育システム、生活様式の三つです。お祭りは、その国独自の文化、宗教観、歴史が良く現れるイベントなので、聞き手が国の特色を一気に掴めるのではないかと思います。教育システムと生活様式は、高校生に向けてのプレゼンなので、アシスタント高校生の意向を聞いて選定しました。イタリアの発表では、お祭りのパートでベネチアのカーニバルを紹介しました。伝統的な衣装や仮面、食べ物は日本の伝統的なそれらと全く異なり、驚きの声があがりました。チェコはビールが有名で、世界一の消費量であることを初めて知った人が多くいました。ベルギーでは教育システムが詳しく説明されました（２１ページ参照)。エジプトの発表では、イスラム教に関するお祭りが多く紹介され、エジプトの特徴がよく感じ取れました。カーボヴェルデでは、カーボヴェルデ・クレオール語の発音を日本語でどんな意味になるのかが紹介され、その意味の違いを高校生は楽しんでいました。このように細かい慣習や言語などが高校生の関心を引き付けていて印象的でした。プレゼン発表後にはイタリアの高校の試験についての質問がありました。これを機に、高校生たちが海外留学に少しでも興味を持ってくれたようで、このような活動に参加できたことが光栄でした。

As a Coordinator, Rahman Sadniman (Bangladesh)

It was my pleasure to be a part of that program as the coordinator. Our group had speakers from five different countries in Europe and Africa. These speakers presented about different amazing facts about their countries. They shared their cultural aspects, history, foods, festivals and many more. Me along with the high school students leant many interesting things about these countries. In our group, the speakers not only just presented, but also, they played quiz games with the students. It was vert interactive and everyone enjoyed a lot. I am grateful to the speakers, my other coordinator, advisors, and student assistants who helped me with conducting the program. My immense gratitude to the Hokkaido Youth Foundation for Science and Culture to organize this nice program and gave me the chance to be part of it.

CABO VERDE

Helmano Fernandes
(Graduate student at Hokkaido University)

It is always a pleasure to introduce my country. Not many people in Japan know about Cabo Verde, so I appreciate the opportunity to share my identity. Events such as this, which bring cultures together, improve our abilities to interact and understand our differences. I really had fun during the event. Not only I had the opportunity to talk about my country (see pictures below), but I also learned a lot about other cultures. I learned about the rich religious and cultural diversity of Egypt, how Czechs love beer so much, the educational system of Belgium, and that you shouldn' t share your Pizza.

☜ The Atlantic Music Expo happens in Cabo Verde

We Love fish

A diverse People ☞

ITALY

Alessandra Mazza
（北大大学院地球環境科学研究院・特別聴講学生）

EGYPT

Yaser Elewa（Assistant professor, Hokkaido University）

Egypt is not a historical country; Egypt came first and history followed. Three kinds of festivals are celebrated in Egypt. The Sun Festival is an ancient Egyptian myth, celebrated twice a year, in February and October, when the sun's rays reach the innermost sanctums of the Abu Simbel Temple. The Wafar Al-Nil festival (Loyalty to the Nile) takes place in August. The October Victory Festival is celebrated when the Egyptian army reclaimed the Sinai Peninsula from the enemy. Education in Egypt consists of kindergarten (2 years), primary school (6 years), preparatory school (3 years), secondary school (3 years) and university (4, 5 or 6 years).

The Wafar Al-Nil festival

The Sun Festival

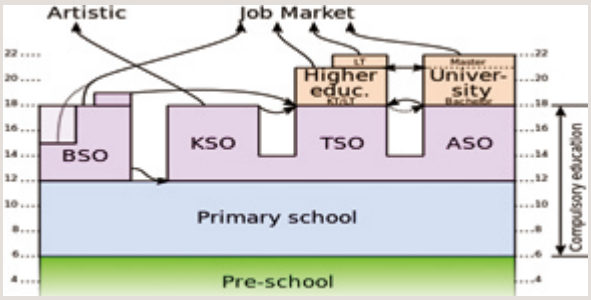
The October Victory Festival

primary school

BELGIUM Speaker **Kiera Vanpanteghem** (AFS student)

I talked about my country Belgium is, neighboring countries, capitals and languages we speak. I also talked about Belgian/European population and currency, language, food, comics in Belgium too. And about Belgian education, stages of education, structure, school life, cost of going to school, etc. talked.

Stages of education：
・Preschool education (Japanese: 幼稚園)
-> 2,5 years old
・Primary school (Japanese: 初等教育)
-> 6 yearls old – 12 years old -> No course
・Secondary education (Japanese: 中等教育)
-> 12 years old – 18 years old
-> choose your course -> Half time a job, half time go to school.
＊ 4 general types:
・General Secondary Education (ASO)
・Technical Secondary Education (TSO)
・Vocational Secondary Education (BSO)
・Art Secondary Education (KSO)
No entrance exam



(左) 初等教育学校　（右）中等教育学校後期 (2 年間在籍予定)

＊ Cost・Secondary education = free・University = > 5000 euro/year　(日本円約 70 万円／年)

CZECH Republic Speaker **Josef Jíhlavec** (AFS student)

I liked the concept of international night from the beginning. Everyone in our team was very interesting and willing to cooperate so the whole process was really fun. Even the Japanese students who doesn't speak English very well was helped by my Japanese-speaking teammates. That was also another sign of teamwork, the communication itself.

I was paired up with a Japanese student with whom I later found out we have birthdays on the same day, things like these also helped us connect. Everybody was tasked to make a presentation on their own country with the main focus being holidays and education. The cooperation with the Japanese student went smoothly and we finished everything a week and a half in advance.

Then came the day. When I arrived, I was very surprised by the size of the event, both the place of presentation and the number of people that arrived despite covid still being present. I was also surprised when I saw my two good friends on the podium introducing the whole event and the princess herself. Her speech must have been really interesting, but I maybe could have used a bit of help, because I didn’t understand much of her presentation. Regardless of that it was still a very nice experience meeting someone from the royal family and I don’t think I’ll ever forget that.

When I was walking towards the main computer as the first one of the presenters from our group it would be an understatement to say I was nervous, but thanks to the kahoot, which perfectly broke the ice, I didn’t stutter once during the presentation. I also saw how everybody was actually listening which also helped with my confidence, that was the advantage of going first, everyone was still full of energy. I’ve met a lot of new interesting people there also, with some I am still in contact with. Thank you very much for inviting me.

アドバイザー　小林 智佳子（AFS 札幌支部）

グループ B は、参加人数が５０名ほどの大きなグループでした。発表した留学生達の出身国は様々で、初めて知るヨーロッパ・アフリカの文化（食生活・お祭・学校生活など）があったと思います。これをきっかけに、自分の目で見て、現地でその生活を体験してみたいと思った生徒さんが、たくさんいると嬉しいです。準備段階では、あいにくスタッフ全員が顔を合わせて打ち合わせすることができず、ほぼすべてオンラインで進めました。コーディネーターのお二人、アシスタント高校生達は、見えないところで、たくさんの時間を使ってスピーカーの留学生達と準備をしてくれました。開催３日前までスピーカーが最終決定せず、コーディネーターは大変ご苦労なさったことと思います。

留学生のそれぞれの発表では、オンラインのクイズ大会アプリケーション “KAHOOT” を使い、発表者が作った自分の国についてのクイズをグループ対抗で行いました。参加者同士が短時間でも交流でき、発表者の国についてより深くそして楽しく知ることができ、大変盛り上がりました。オンラインのツールを上手に使うことで、準備から当日の進行まで、効率的に行うことができました。それでも、もっと直接対面で交流し、意見交換できるようになることを願っています。

アドバイザー　林　祥史（北海道科学大学高校教諭）

Group B には数多くの生徒が集まり、コロナ対策で難しい中でもかなり活発な時間を送ることができたと思います。ヨーロッパのみならず、アフリカの国々にも参加してもらい、短時間でさまざまな国・地域の話題をその国の方に提供してもらえたことは、これから海外へとはばたく若い生徒たちの財産になったはずです。一方で、コロナ対策の制限によりディスカッションができないことは残念でした。

やはり、生徒としてはより近い距離で、英語で海外の優秀な方たちとお話できること、やりとりが成立することは大きな自信につながります。来年度はどうなるか、まだわかりませんが、一人の英語教員として、一日でも早く活発なディスカッションができる時代に戻ってほしいと切に願っています。

Assistant　三好 菜乃　Nano Miyoshi（北星学園女子高校）

I am very happy to have been able to participate in International Night as a high school assistant. I thought about how important it was to get the other high school students interested in the country of the group I was in charge of. I also made an effort to actively express my opinions in the group. It was great to get information that I didn't know as we worked as a group. It was great to be able to communicate directly with the people in my group, not just participate in the activities. It was a good opportunity to broaden my horizons. Thank you so much to give me this great opportunity.

Assistant　佐孝 琉菜 Luna Sako（札幌藻岩高校）

I participated for the first time. I am not good at English. But I wanted to know about the country directly from students living abroad, so I decided to become an assistant. I prepared a presentation about the Czech Republic with Pepa. It made me realize that I took it for granted that there was an ocean around my country. Other than that, the Czech Republic belongs to the EU, but money is a unit of its own country. I didn't know what the Czech Republic was like in the first place, so everything was a new discovery.

My dream for the future is to become a math teacher. I thought there was no need to teach in Japan through this event. That's why I'm talking to the Japan Overseas Cooperation Volunteers. I was very happy to have this opportunity to find a new career path. Thank you for the wonderful time.

Comment from Phuenkratoke Natdanai (Thailand・AFS student)

I was really happy and fun joined the international night. It was a wonderful experience and most importantly memory. As a cultural exchange student, I was so proud to share my culture and received other cultures to share to my hometown in near future. I hope in nearly future I will be here and join a useful event like this again.

Comment from Bin Abdul Hadi Dani Yusuffi（Malaysia・AFS student)

International Night was a very enjoyable event. It was very interesting to learn and interact with cultures all over the world in one single place in Sapporo. The many presentations we got from many people and the chance to ask questions about it was very valuable and fun. It was also an interesting experience to see someone as noble as Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa. I think it is very impressive and inspiring of Her Highness' achievements and studies. Meeting a lot of new people whether it be Japanese or from other places was a really great experience and I enjoyed it very much.

Comment from　Kiera Vanpanteghem (Speaker・Belgium)

I am happy that you invited me to talk about Belgium. It was a beautiful experience. I am normally a shy girl but when I am here in Japan it’s gone but I was still nervous. It was a honor to speak in front of her highness princess Akiko to. I was just going to begin to talk about my country when her highness came into the room. It made me more nervous. Hahahaha. Thank you all for inviting me and AFS to this event.

Group C North ／ Latin America

Mexico・El Salvador・Colombia・Brazil・Canada

Coordinators：Ranjani Rajagopal（India・Graduate student at Hokkaido University）
Assistant：塚田桃子 (開成中等教育) ／野村花音 (国際情報高）／田口美音・大平あい（立命館慶祥高）
Adviser：Rakesh Dixit (開成中等教育学校) ／児島充子 (札幌ユネスコ) ／上島　忍 (AFS 札幌)

Mexico

Speaker：Lopez Ayala, Silvia Medujori（北海道大学大学院）

首都はメキシコシティ、私のふるさとです。今メキシコは平等の実現に努力しており、その中には先住民がいます。メキシコの全人口１３億人のうち７００万人は６８の現地語を話します。

日本と同じように祭日は学校に行きません、でも学校に行く日もあります。例えば９月、独立の日は学校に行って国旗の色で学校を飾り、メキシコの伝統的な食べ物を食べたりします。家族と出かけたかったらマヤーとアステカのピラミッドを見に行ったり、海はきれいなのでお勧めです。

メキシコシティは世界中で博物館が一番多くある街です。Frida Khalo や MUAC 美術館などをおすすめします。

El Salvador

Speaker: Jorge Magaña

I talked about the distance from Hokkaido to El Salvador (11,869km), and I asked the students how big they thought my country was compared to Hokkaido. Hokkaido is 4 times bigger than El Salvador, that shocked the students quite a bit. During the presentation I mentioned a couple of things that El Salvador is famous for, tourism being the most important one. Volcanoes and beaches are the two main motivations for tourists to visit the country. I talked a little bit about the capital of the country, which is the city I live in. The beaches in El Salvador are popular internationally because of surfing. Various beaches host national and international surf competitions, and they attract a large part of the tourists that visit the country. Also important are mountains and volcanoes. Despite its small size, El Salvador has a lot of active and inactive volcanoes that are a popular site for hiking and ecotourism.

I also talked about various types of food we have in El Salvador. Because of its cultural roots, a big part of our cuisine is based on corn. I love how we can transform the same ingredient into many different dishes. At the end of the presentation, I mentioned a couple of festivities that are celebrated in El Salvador. As we were a Spanish colony, there was a mixture of Spanish customs and the customs of our ancestors, resulting in colorful, unique, and exciting festivals throughout the country.

I also talked about the difference of how we celebrate Christmas in El Salvador and Japan, which is mostly a religious event celebrated with friends and family in El Salvador.

Coordinator Ranjani Rajagopal（India）

I had the honor and pleasure of being the coordinator for Group C at the 45th Sapporo International Night. The speakers in my group were from Canada, Mexico, El Salvador, Colombia and Brazil and the main themes of their presentation were 'Diversity' and 'Education system' .

Tiara from Canada shared insight about the diversity of language and culture, education system and popular Japanese brands in her country. The high students were also able to learn a few words in her native language, Cree. Silvia from Mexico shared the history, diversity and celebrations in her country and also a day in the life of a high school student in Mexico. Jorge from El Salvador spoke about the country's rich natural history, culture, food and celebrations. Luisa from Colombia spoke about the diversity of nature, people and popular exports of Colombia such as coffee or flowers. Her presentation concluded with an interactive Spanish lesson. Bruna highlighted the diversity of cultures, people and popularity of Soccer in her country, Brazil. The high school students were surprised to know that World cup match day is like a holiday and that Carnival is one week of parties in Brazil!

The speakers spoke passionately about their home countries, and I am sure this broadened the perspectives of the high school students and inspired them to study abroad. I am also grateful for the support from the assistants and advisers who were an integral part in executing the event seamlessly.

C グループ、ブラボー！！　上島　忍（AFS 日本協会札幌支部支部長）

かなりバラバラで長期間に渡ったたが、リーダーの統率力によってオンライン中心に活発なやり取りが交わされ、スピーカーの誰かがヘルプを出せば、高校生がそれに応えるという、とても素晴らしいチームワークを見せてくれた。高校生が知りたいことは何か、という質問からこういう方向性でいこうと決まり、パワーポイントに日本語の訳文をつけるまで、ギリギリにはなったものの、無事、当日を迎えられた。各国の紹介では、現地の人でないと知らないことも多く、教科書では学べないその国独自の事情を知って、参加した高校生にとってはとても刺激になったと思われた。当初は緊張してあまり質問が出なかったが、後半は少しジョークを交えた質問も出てくるようになり、笑いが起こることもあった。世界は広いと改めて思わせてもらえる機会となったことだろう。第 3 部での発表は、スピーカーの原稿を端的にまとめあげ、その中でエッセンスとなるポイントをきちんと抑えて伝えることができた。リーダーも、アシスタントの高校生にとっても、貴重な経験になったと思われる。素晴らしいチームワークを見せてくれた皆さんにブラボーと拍手を送りたい。

Adviser Atsuko Kojima（Sapporo UNESCO Association）

As a director of UNESCO Sapporo, I participated as an advisor to Group C, which represented North and Latin America. International students in Group C prepared presentations in advance about their respective home countries' cultures, histories, and relations with Japan, collaborating on LINE ahead of the event. On the day of the event, all of the high school students presenting in Group C asked questions in English. Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa, who gave a wonderful speech on the theme of "Learning about Japan Abroad" in the first part, also came to the Group C classroom and listened attentively to the students' questions, which I believe was greatly inspiring for them.

Japanese high school students from Sapporo served as MCs in English, and foreign high school exchange students served as MCs in Japanese. Despite the short practice period, they hosted the event admirably, even ad-libbing when the situation called for it. I hope this event will encourage young people to aim for the world and apply their understanding and peaceful ideals to succeed on a global stage.

Adviser, Rakesh Dixit, (Teacher, Sapporo Kaisei Secondary school)

I think this event was an extremely valuable experience for students, and it was both rewarding and enjoyable for all the participants. I felt the message that came through strongly, in both Princess Akiko's excellent talk and the individual seminars, was twofold. Firstly, in order to achieve real intercultural awareness and understanding we need to learn about the true situation in other cultures and countries, and not rely on hearsay or biased information. Secondly, we should be aware that we represent our country when we are overseas, and it is therefore necessary for us to be more knowledgeable about its history, traditions and culture, in order to communicate this to others.

I am sure that the students who attended this event will now have increased motivation to explore the world for themselves and contribute to a peaceful global society.

アシスタント 田口 美音 (立命館慶祥高等学校)

私は高校生アシスタントとして、少しでも皆さんの力になれるように話を聞いて、自分の意見を多く言えるように心がけました。私は海外の方のスライドの日本語を添削しました。そして日本人として、日本語を正しく使えることの大切さも教わりました。迎えた本番では、国の文化の違いや日常生活の違いなど、たくさん新しい知識を得ることができました。私が今回参加して思ったことは、国や言語の違いはとても素敵なことなのだなということです。国や言語が違うからこそ、そこからよりたくさんの文化が生まれるし、言葉も生まれるのだと思います。その違いを認め合うことでお互いの国を尊重でき、世界の発展に繋がるのではないかと思いました。こんなにも沢山の素晴らしい文化や歴史がある地球上ではもっともっと人々が繋がってほしい。国や言語の違いは、争うのではなくその違いを受け入れて、自ら相手のことを知ることが大事なことだと心から思いました。

Assistant　野村 花音 （札幌国際情報高校）

In writing this report, I would first like to thank you all. It was a great experience for me because I did not have many opportunities to participate in activities with different nationalities. In the beginning, I had many anxieties. I was able to communicate in English, even in poor English, but the team members understood me. When I was able to communicate in English, I was happy to feel that my English study had paid off, and it also made me want to study English harder. I enjoyed listening to the introductions of many countries I did not know. Her Imperial Highness Princess Akiko's lecture was very valuable to me. When I study abroad, I would like to be prepared that I am carrying Japan on my back, and I would like to be able to introduce my country, Japan, with confidence.

Assistant　Momoko TSUKADA　塚田 桃子 (札幌開成中等高校)

Before participating in the International Night, I thought these countries were very different from Japan. I participated in and talked many speakers as assistant, I realized they spent school life as same as us. Although there are unique cultures such as school rules, time schedule or events, they had talked to friendship and trend with their friends and hung out with them at movie theater or malls as we do with our friends. Then, what speaker, other assistant and I became friends is very precious. In the midst of the pandemic, it was great time that I could discuss many topics about environment, government, and so on with speakers from other countries and high school students among Sapporo.

アシスタント　大平 あい（立命館慶祥高校）

私はアシスタントとして様々な経験をすることができました。このような国際的なイベントに参加するのは初めてですが、コーディネーターの方やスピーカーの方とうまく連携をとって自分の仕事を全うし、スムーズに進めることができました。第二部、第三部では、それぞれの国の文化や多様性などその国ならではのものがあり、日本との共通点があると、少し身近に感じました。女王殿下のお話を聞いて、海外では異なった意見を尊重し、一人ひとりが自分の意見を相手にしっかり述べることが大切であるということを知ることができました。また海外で、自分が日本のことを深く知っていないということに気付かされたというお話が印象的でした。実際の海外留学の経験をもとにした貴重なお話を聞くことができて良い時間になりました。今回、様々な国の方と交流することができてとても楽しかったです。自分の英語のスキルをさらに向上させて、今よりもスムーズに楽しく会話をすることができるように頑張りたい、海外のことをもっと知りたいと思えるような素敵な機会になりました。

Comment from Tan Donaviphou (Cambodia)

I think the International Night was very interesting. There are many people from different countries that come together in one place which make the experience very exciting to me and I think other exchange students and Japanese people feel the same too. The afternoon session was very interesting too. I got to learn a lot of culture and things from foreign countries. In those session we interacted by asking questions and talk about the presenter's country. At the end was the presentation of each group's country and even though I wasn't in the group with them, the details they highlight give me a gist of each country. Moreover, I got to wear my country national costume which at least show a bit about my country. The participation of Princess Akiko also give the event such a nice experience for me because I got to meet such an important person in person. Overall, I think the event was very interesting and informative.

Comment from Zhafira Alifya (Indonesia)

The international night that I participated in on December 11 become a strong memory that is imprinted in my mind, I met many international students and also Princess Akiko, it was n honor to meet her. This meeting not only allowed me to get to know more about their culture and themselves but also allowed me to understand that everyone with different backgrounds and cultures has the same opportunity to seek the highest knowledge possible, Those who proudly represent their country inspire me to be like them. I believe this meeting has inspired many people to seek knowledge in different parts of the world and make connections with global citizens, This meeting changed the way I see the world, that there are many colors in it not only black and white, there are differences that unite us all in a harmony that unites to make the world better.

Group D The 5 countries in the world

India・Turkey・Finland・Canada・Congo

Coordinators：Yannick OLIVEIRA (Angola・Graduate Student at Hokkaido Univ.)
Assistants：伊山陽菜・佐藤羽純・河合くるみ（札幌丘珠高校）
Advisors：遠藤雅公（札幌丘珠高校教諭）／池田達昭 (国際ロータリー 2510 地区）

Group D　Coordinator　Yannick OLIVEIRA

To me, the 44th Sapporo International Night represented a strive for a connectedness and the need to leading the world into uniting even in difference, which got more evident with the presence and shared experience of Princes Akiko of Mikasa, the royal family of Japan. It was an honor to act as a coordinator to Group D of countries from the entire world regardless of continent. Sudeshna, from India provided us with an amazing outlook of the beauty of Indian history and Architecture, its culture, and colors. Similarly, Kubra, from Turkey presented us with the Nature and Architecture but also the culture and the country's love for animals and cats in special. Siiri gave us a beautiful outlook on the Finland's education system, seasonal differences, and nature, and long periods of night and day. Tyler, from Canada, gave us the most interpersonal side of Canadian culture, specifically on high school culture and the significance of "prom" . And lastly, Eric blessed us with the beauty of Congo's culture, art production throughout history, and language diversity. I got incredibly impressed with the questions we got from the high school students, which showed their deep engagement and interest. I believe that at least for the students, we managed to connect them to the world a little bit more, in hopes they pass it forward expand on that, every day, little by little.

[Great experience]　アドバイザー　遠藤 雅公（札幌丘珠高等学校教諭）

世界中から選ばれた５カ国の留学生のプレゼンテーションは、発表者の使用言語（英語または日本語）の如何を問わず、発表後は参加者から矢継ぎ早に質問が出された。盛会だった。

司会はアンゴラ出身のヤニック・オリヴェイラさん。場をつなぎ、懸命に進行役を務めてくれたことにスタッフ一同感謝している。残念だったのは、高校生のアシスタントが出る場面が少なかったことだ。大会数日前にメンバー全員でオンラインによる打ち合わせをもったが、留学生のプレゼン資料が揃わず高校生たちを含め全員で共有できず、司会進行の一翼を十分に担えなかったのは大きな反省点である。

この行事の最大の魅力は、北海道にいながらにして世界中の人々とふれ合い、異国を感じられるところである。複数の言語が飛び交うなかで耳を傾けながら、文字通り札幌が国際的な場所だと認識できるこの集いが、これからも多くの若者たちに刺激を与える場であってほしいと強く願う。

India

Turkey

Finland

Siiri LIPPONEN（Hokkaido University）

In the presentation, I mainly focused on Finnish education system and school life, as well as Finnish work-life balance and how it can be seen in our lifestyles. Basic school education in Finland has gone through some drastic changes over the years. Digitalization is rapidly going forward, and as an example I explained how schools use E-books and students are required to have a laptop or some sort of tablet to complete schoolwork. These are in some cases given to students by their schools. I also discussed the differences between Japan and Finland when it comes to attitudes towards education. As for work-life balance, in my presentation I described how in Finland people tend to spend their free time, or longer holidays. I mentioned Finnish saunas, summer cottage culture, everyman’ s rights and simply how in general nature is often a big part of our free time activities. This can perhaps be explained by how prevalent nature is in Finland in the first place, as most of our land is covered either by forests or lakes.

Canada

Speaker　Tyler CHOY（国際ロータリー交換学生）

Congo　コンゴ民主共和国

【WE CANNOT ALWAYS BUILD THE FUTURE FOR OUR YOUTH, BUT WE CAN BUILD OUR YOUTH FOR THE FUTURE】

アドバイザー　池田　達昭　（国際ロータリー第 2510 地区青少年交換委員会）

記念講演者として彬子女王殿下をお迎えし、成功裏に導かれました役員、関係者そして留学生の方々の大変なご苦労をお察しするとともに心よりお祝い申し上げます。時代と共にさらに国際都市化を目指す札幌市にとって大きな意義をもたらすこのイベントは４５回を数え、世界中の学生と日本の若者の間の異文化理解、国境を越えた友情と親睦をもたらされました。世界各地からの発表者は、自国の歴史、文化、教育制度、地理ついてよく調べられ、参加者に対して分かり易いプレゼンをされました。日本の若者たちには、これほど熱心に自国を紹介できる、または世界中の若者が一同に会したこのような機会に、自分のプレゼンスを高めることができるよう期待したく思います。我々自身も世界市民の一員となりリーダーシップを発揮しグローバル化への対応と進化を果たし、世界共存という平和構築を最終目的に、未来を担う青少年たちの少しでもお役に立てますよう微力ながら協力してまいります。

（＊タイトルは、アメリカ合衆国第 32 代フランクリン .D. ルーズベルト大統領の言葉を引用しました）

アシスタント　河合 くるみ（札幌丘珠高校）

初めての参加で、しかも国際交流の経験もなく英語もあまり話せないので、とても不安で緊張しました。けれども、皆さんが優しく日本語で接してくれたので緊張は解け不安も消えました。１回目の準備会議ではその国の何について知りたいのかについてたくさんの意見やアイデアが出され、２回目はオンライン会議を開き、当日の動きについて話し合いました。本番当日はみんなでお昼ごはんを食べながら自己紹介をし、質問を出し合って交流を深めました。私たち高校生スタッフは一人ひとり発表者の紹介をしました。留学生の方々の発表がとても上手で自分たちの知らない世界のことを知ることができました。運営でも、留学生の皆さんが優しく接してくれ、大会に向けて積極的にリーダーシップを取ってくれたおかげで、イベントの成功につながりました。貴重な経験ができて本当に楽しかったです。

アシスタント　佐藤 羽純（札幌丘珠高校）

アシスタントとして様々な方々と交流ができました。予定日までに発表資料が届かず、１回も練習できずに開催日を迎えるというハプニングもありましたが、当日は、先生方や留学生、そして同じグループの高校生アシスタントと協力し合って何とかうまくいった気がします。反省点としては、人見知りをして自分から話しかけにいけなかったことやスピーカー紹介がうまく出来なかったことです。こうした失敗は次に生かしたいです。女王殿下のお話からは沢山のことを学びました。日本に住んでいても知らないことが多いので、海外の方から質問されたときに答えられるように日本のことをもっと勉強したいと思いました。コロナ禍で海外の方と触れ合う機会がないので、本当にいい体験になりました。

アシスタント　伊山 陽菜（札幌丘珠高校）

今回初めてアシスタント・スタッフとして参加し、とても良い経験になりました。英語はあまり出来ないのですが、スタッフとして初めての会議では日本語を中心に話し合いを進めてくださったので内容を理解することができました。グループの人たちの予定が合わず、プレゼンテーションの留学生との交流は当日だけでしたが、ここでも日本語で交流することができました。第１部では彬子女王殿下から留学中の貴重なご経験を伺うことができました。私はまだ留学したことがなく、殿下のお話を聞き、日本で習う英語と海外で実際に使われている英語では、聞き取りやすさも、話しやすさも違ってくるのだと感じました。

第２部では多くの国についてのお話を聞くことができました。次回もぜひ参加して、もっと英語を使って留学生との交流ができるようになりたいと思いました。

グループＤスタッフの皆さん

Comment from　Phommavohane Somsiri（Raos・AFS student）

The 45th Sapporo International night, for me, is very heart-warming to meet other international students as we came from different cultures, but we are all experiencing Japanese culture which there are a lot of differences to adapt to and to share with. Also, we here as a representative of our own country. Besides the global learners, it was very honoring her highness, Princess Akiko, who graciously told us about her life as an exchange student in Oxford university. I am glad to hear and see her highness in person, it is very surprising for me because in my home country there is no Loyal family. The organisation of the event is so successful everything is set ready and very punctual. Thank you to the organisation staff who organised this wonderful event and created an opportunity for international students in Sapporo to meet each other.

Comment from　Dalloran Alyssa Meg（Filipina・AFS student）

World peace is only attainable if we equip ourselves with knowledge of other people's culture and beliefs. This is what I learned from the International Night. If it weren't for the event, I wouldn't have been enlightened about the different circumstances that people from overseas go through. It was such a heartwarming experience, what with meeting and hearing the Imperial Princess Akiko of Mikasa. Her speech about what she learned from Oxford University made me admire her even more. It also made me strive to do even better in my studies. As an exchange student, it was also an honor to meet other exchange students from all over the world. Being able to ask and discuss things about their own countries was a worthwhile memory. With the knowledge I have learned through the event, I plan to even make my exchange memorable.

Comment from　Ariyadasa Sathushmi Nethara（Sri Lanka・AFS student）

Currently I'm in a cultural exchange program named Asia Kakehashi. I love representing my country and its culture. International night was a chance for me to represent my country wearing the national costume. I asked many questions from everyone and gained lots of knowledge. Now I want to try Indian food, buy the 'Evil Eye' from Turkey and see beautiful sunsets in Finland. We were honored to meet Princess Akiko. Her speech was really inspirational. Also, it would be great if there was a dance, song or musical cultural performance from a country. Then it would've been more entertaining and enjoyable. I thank everyone who invited us to join this wonderful event. It was an unforgettable day filled with unforgettable experiences.

Comment from　Abiyyu Zaki Musyaffa（Indonesia・AFS student）

I think the event was very educational. I learnt many things about other countries. I enjoyed the presentations. Probably there is one thing that I want to have if I can join event like this again. The presentations was amazing, but I think it will be a great idea if we can have more interaction with the guest speakers. Like quizes or games. I think it will make the event even more interesting.

Comment from　Wnag Che（中国・AFS student）

他の国家の教育の仕方や理論などを学びました。その上、自分の国と違うところがたくさん見つかりました。これらに基づいて、自分の成長の過程で多くの欠点を発見しました。そのため自分が優秀になるため、目標を達成するためには、どの様な練習と努力が必要なのか前より分かりました。教わるところが多い、こんなチャンスを受け取れたことに感謝します。

The 3rd Part（第３部）: Presentation “Let’s Share!”

＜15:30 ～ 17:00＞　"Eminence Hall”（Keio plaza hotel Sapporo）

実行委員会代表挨拶　　実行委員長（北海道大学理事・副学長）　横田　篤

お言葉　　**彬子女王殿下**

Greetings of Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa

ご来賓代表のご挨拶　　札幌市長　　秋元　克広　様

Emcees：Thu Huyen Tran（Vietnam）
竹中 龍之介（立命館慶祥高校）

第２部 Seminar “**若者よ世界へ！**”

報告 (REPORT on the 2nd PART: Seminar)

ご感想（ご来賓を代表して）

札幌ユネスコ協会会長　　横山　清　様

閉会のご挨拶

（一財）北海道青少年科学文化財団

理事長　岸浪　建史

実行委員会代表のご挨拶（第３部の開始にあたって）

サッポロ・インターナショナル・ナイト実行委員長
北海道大学理事・副学長　横田　篤

実行委員長の横田でございます。私は第二部では彬子女王殿下とともに各グループを回らせていただきました。留学生や高校生などスタッフの方たちが大変よく準備をされ、また Speaker の方々が自国の様子を大変魅力的に伝えておられました。

午前中の記念講演で彬子様は、「自国の紹介をするということは、自国を熟知していなければならない」とおっしゃっておられました。日本人であれ、何処の国の学生であろうとも、留学生になるということは、大変責任のあるお立場であるというふうに拝察致しました。

北海道大学の前身である札幌農学校の二期生に、思想家として著名な内村鑑三先生がいらっしゃいます。その内村先生の「余は如何にして基督信徒となりし乎」という著書の中の先生のお言葉の一部を読んで紹介させていただきたいと思います。「その国を一歩出て個人以上である。彼は彼自身の中に彼の国民と彼の民族を担う。彼の言葉と行為はただ彼のものとしてではなく、彼の民族と彼の国民のそれとしてもまた判断される。かくてある意味では異境における滞在者は、いずれも彼の国の全権公使である。世界は彼を通じて国民を読み取る。」と。

皆様がた若い方々には、これから世界に出て、広い視野を持ってご自身の道をしっかりと歩んでいただきたい、活躍していただきたいと思っております。その時に日本の全権公使として責任を果たせるように、今日のインターナショナルナイトのご出席をきっかけにその準備をはじめていただければ幸いと思っております。

第三部の冒頭にあたり、この「インターナショナルナイト」が大変有意義であるということをお伝え申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

おことば

彬子女王殿下

本日ここに、第４５回記念サッポロ・インターナショナル・ナイトが大勢の参加者をお迎えして開催され、皆様にお目にかかれますことを大変うれしく思います。

サッポロ・インターナショナル・ナイトは、道内で勉学する外国人留学生と日本人青少年との相互理解を深め、交流を行うことを目的とし、１９７９年に第一回が開催されました。以来、多くの留学生や留学を目指す日本人学生にとって、貴重な意見交換の場として発展し、今年で４５回という節目を迎えられたことに対し、心よりお喜びを申し上げます。

最近は、若い世代があまり留学や海外研修などに積極的ではないと聞きますし、コロナ禍の影響もあり、海外にいける機会も交流できる機会も減ってしまっていますが、インターナショナルナイトでは、若い方たちが進んで発言し、留学生の人たちに話しかけ、楽しそうにおしゃべりをしておられる姿をよく見かけます。こういった方たちが世界に出て世界を知ってくださることが、日本の未来を明るいものにしていくのだろうと頼もしく感じております。

人間関係を円滑にするには、まず相手を知ることから始めるなどとよく言いますが、海外の場合も同様で、まず相手の国を知り理解することが、その国でうまくやっていく秘訣なのではないかと私は考えています。人間は、なにかと自分の物差しで物事を判断したがるところがあります。日本の常識が世界の非常識ということもありますし、逆もまたしかりです。自分の物差しで測れない物事を、「ありえない」「考えられない」と受け入れられない人もいますが、相手の国の歴史や環境を知ると、何故そのことが行われているのかを理解することができたりします。

例えば、オックスフォード大学留学中のチュートリアルの際、私が何か意見をすると、他の学生に反対意見を滔々と述べられ、自分が否定されたような気持ちになり、その後何も言えなくなってしまったことがありました。でもその後、「私はこう考えているけれど、アキコの意見もおもしろかったわ」と言われ、彼女は私を言い負かそうとしていたのではなく、議論を戦わせようとしていたのだと理解することが出来ました。これは私の留学生活を意義深いものにすることができたきっかけとなる出来事だったと思います。

本日のインターナショナルナイトが、参加者の皆様にとり、お互いの国のこと、日本のことを理解し合うきっかけになることを祈りつつ、私よりのご挨拶といたします。

ご来賓を代表して（お祝辞）

札幌市長　　秋元　克広

皆様こんにちは。札幌市長の秋元克広でございます。本日は彬子女王殿下ご臨席のもと、第４５回記念サッポロ・インターナショナル・ナイトがこのように盛大に開催されますことを心からお喜びを申し上げます。また開催にあたりご尽力いただきました北海道青少年科学文化財団をはじめ実行委員会の皆さまにおかれましては、日頃より青少年の国際理解を深める活動にご尽力をいただいておりますことに、深く敬意を表する次第でございます。

さてこの三年ほどは、新型コロナウイルス感染症によりまして、国を超えた交流が難しいものとなっておりましたが、最近はようやく海外と日本との往来が本格的に再開しつつあります。また札幌市に住む外国人市民の皆様は、コロナ禍の状況により一時減少しておりましたが、現在は１５，７００人余りと、過去最多を更新しており、今後もさらに増加してゆくことが見込まれております。こうした状況のもと開催される本会において、札幌圏に住む高校生や留学生の皆様が、交流・意見交換を行うことは本市のより一層の国際化に寄与するにはもちろんのこと、国籍や民族などの違いを互いに認め合い尊重しあう多文化共生の実現に繋がるものであり、多くの学生がご参加されていることと大変喜ばしく思うところであります。

本市と致しましては、こうした若い世代の声をしっかりと受けとめながら、引き続き様々な取り組みを進め、市民の誰もが誇りと希望を持ち暮らせる街づくりを進めてまいりたいと考えております。ご来場の皆様には引き続き国際化の進展・多文化共生社会の実現にお力添えを賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、本会がご参加の皆様にとりまして実り多きものになりますことと、皆様の益々のご健勝ご活躍を心からご祈念申し上げましてお祝いの挨拶とさせていただきます。有難うございます。

Group A
Asia/Oceania

Group B
Africa/Europe

Group C
North America /Latin America

In the third part, "Presentation; Let's Share!", key staff from four groups from 19 countries who introduced their countries in the second part of the seminar gave group reports in front of 245 participants from 29 countries, including Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa.

Many high school students, who filled the hall in particular, listened attentively to the unique and fascinating reports, which focused not only on the history and culture of each country, but also on the educational environment in particular. The role of each presenter was shared by the International Student Co-ordinator of the Graduate University and the high school students, demonstrating some of the growth that the high school students have developed over the 45 editions of the conference.

The day was a reminder that [Sapporo International Night], with its unwavering track record in event management even during the period of great turmoil caused by the coronavirus and the Ukrainian crisis, will soon celebrate half a century since its inception.（M. Iguchi）

Group D
5 Countries selected in the World

「若者の世界へ帰りたい」

札幌ユネスコ協会 会長　横山　清

ご紹介頂きました横山でございます。先程から皆さんの報告を聞きながら「若者の世界へ帰りたいなあ」という率直な思いにかられました。私の高校時代はもう７０年以上も昔、第２次世界大戦が終わって間もない頃ですので、「世界へ」なんて考えたことは全くありませんでした。現在私は「アークス」というスーパーマーケットを経営しており、ビジネスで食べ物を仕入れ、あるいは珍しい食べ物を日本で普及させましたが、皆さん方、若い人たちが世界の文化や人々の生活に目を向けているのを見ると、どんどん変わっていく世界の現状を若い人の目で見ることが必要じゃないか、出来たら高校生の皆さんと同じような気持ちで世界へ飛び出さなければいう気持ちになったのです。

このインターナショナル・ナイトには、私はもう何十回も出席していますが、本当に毎年毎年、新しいものに挑戦しているなあと感心しております。近年は、新型コロナウイルスの感染拡大の影響でいろいろ大変だったでしょうが、いろいろ工夫して開催に漕ぎ付けております。来年からも楽しみでございます。

実は私、２５年以上前、殆ど知らなかった北欧フィンランドの名誉領事を引き受け、それ以来十数回フィンランドを訪問しております。「知らないことを知る」ということの喜びですね。それから「知ることだけではなくて、周辺の人々に新しい情報を伝えていく、熱いエネルギーを伝える、そんな事が大事かなと強く感じております。

今、ウクライナでの戦争やその他様々な問題が世界で起きておりますが、やはり、世界中の人々が平和で豊かで楽しい生き方ができるような世の中が一日も早く実現することを願うばかりです。今日は本当に素晴らしい会でございました。私は、この集いがずっと長く続くよう願っており、私もこの会の継続のため、今後も支える力になりたいと思っております。

本当に、今日は素晴らしい日でした。有難うございました。

The 45th Commemorative SAPPORO INTERNATIONAL NIGHT

[Number of Participants:245]（The 1st part：221、The 3rd part: 230）

Japanese (195 persons)	High school students (21 schools)		129
	College students (1 school)		1
	Persons in general (Adviser, Supporter and others)		46
	Guests & others		32
Foreigners (37 persons) (31 countries)	University & graduate students	20 (20 countries)	20
	High school students	14 (13 countries)	14
	High school teachers	3 (2 countries)	3
	Total		245

Europe（5 countries）：England、Bergiem、Italy、Finland、Czech
Africa（4 countries）：Egypt、Angola、Congo、Cabo Verde
North, C., S. America（5 countries）：Canada、USA、Brazil、Mexico、Columbia
Asia (16 countries) : Turkey、Kazakhstan、India、Sri Lanka、Laos、Bangladesh、Nepal、Cambodia、Thailand、Vietnam、Malaysia、Indonesia、Philippines、China、Taiwan＋Japan
Oceania (1 country) : Australia

閉会のご挨拶

（一財）北海道青少年科学文化財団　理事長　**岸浪　建史**

本日は、第４５回記念サッポロ・インターナショナル・ナイトを成功裡に開催することが出来ましたことを、ご参加いただいた方々、ご協力いただきました諸団体の皆さまに、先ずはお礼を申し上げたいと思います。

特に、ご多忙の中ご臨席を賜りました本財団の名誉評議員 彬子女王殿下には、午前中に開催されました記念講演会で、「海外で日本を学ぶ」と題してご自身の留学体験をベースに、進む国際化の中で、日本人の生き方としてそれをどのように獲得するかというお話を拝聴させていただきました。これから社会に巣立っていく北海道の青少年にとりまして大変興味深く意義あるご講演でなかったかと、私も深く感動致しました。本当に有難うございました。

また、本日午後に開催された第二部では、「若者よ、世界へ」と題してアジアやヨーロッパなど世界を四つに分けたグループ毎に、２０カ国の留学生が自国の歴史や文化、教育事情などを紹介し、参加した各国高校生と活発な質疑が行われました。コロナウイルスの感染拡大で、ここ数年控えられていた留学生と高校生が相互に意見を交換するサッポロ・インターナショナル・ナイトの本来の姿が蘇りつつあったように感じました。今回参加された留学生、高校生の皆さま方が、今後更に努力されて、母国を意識した国際的な人材になっていただくことを強く期待致しております。

最後に、ご支援いただきました北海道国際交流・協力総合センター様、札幌ユネスコ協会様、株式会社アークス様、いけばなインターナショナル札幌支部様をはじめ実行委員会各参加団体の皆様方に、この場をお借りして心から御礼を申し上げます。本当に有難うございました。

記念写真 花盛り

上左：ＡＦＳ高校留学生を囲んで
上右：藤女子高校
下左：札幌開成中等学校
下右：札幌国際情報高校
（＊全参加高校を撮影出来なくてすみません）

高校生司会者の皆さんより ~Comments from high school Emcees~

Ruzgar Ozgonul (Turkey ／ AFS Student)

This year I was appointed as one of the emcees for the 45th Commemorative Sapporo International Night. As the emcee group, we worked hard on polite Japanese patterns, maintaining the flow of sentences and diction a lot. Thanks to all this hard work, personally, I became aware of Japanese language riches and improved my public speaking ability very much.

I had the opportunity to listen to many cultures in the world, all over the world. When I was listening all the conversations, I realized, knowing different cultures, visiting other countries and meeting different people make to understand the purpose of life. Or the way to be happy, to be colorful.

This year, Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa attended there. Princess's speech was met with great applause by the participants. It was more honorable for me to see The Princess face to face. Because Princess is the President of the Turkish Association, she helped my country gain sympathy in Japan as a result of his numerous visits and archeological studies in Turkey. So I was very happy to present as a emcee in front of The Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa this year. It was definitely an unforgettable moment for me.

I would like to thank all my teacher at Ritsumikan Keisho and other everyone for their support. It was an unforgettable day with your support.

曽ヶ端 春南 (立命館慶祥高校)

First of all, thank you for all organizers to held a great event. It was very interesting for me to know a lot of countries. I was in charge of Emcee. It was my first experience to host in front of many people, so I was nervous whole time I was hosting. But after deciding to do Emcee, we got together with other Emcee members and practiced many times. We did not have enough time to perfect it, but we practiced hard in the short time we had and I think we did our roles as Emcee well. I don't think I will have many experiences like this in my future life. So, I am very happy to have had this valuable experience. I would like to participate again if the opportunity arises. Thank you very much.

Thu Huyen Tran (Vietnam ／ AFS Student)

今回、初めて司会を担当しました。初めての体験でとても緊張しましたが、無事に終えることができ、自分の自信につながりました。色々とアクシデントもあり、時には私には無理かと思いましたが、先生やパートナー、周りの人たちにも助けられて自分の可能性を破ることができました。一生懸命、熱心にやるみんなの姿をみて自分もそうしなければと思いました。さまざまな国の人に出会い、世界にはたくさんの問題があふれていることを知り、自分の考え方が変わってきました。各国の留学生の方や学校の先生から色々と自分の将来に役に立つことを得ることができました。今回は私にとってとても有意義な経験となりました。本当に有難うございました。

竹中 龍之介（立命館慶祥高校）

First of all, I want to appreciate for having the chance like this opportunity. This experience was very beneficial for me. I had never been MC in front of so many people, and I felt I would never have had such an opportunity in the future if I had just spent my life in a normal way. Therefore, it made me very nervous, because the script arrived later than I had imaged. So I could not practice until I was satisfied with it, and also I had the fear of being watched by so many people. I felt that it is not easy to be that nervous. The generous support they gave us when we were nervous was a great help. Thank you so much for letting us have this kind of experience.

ハイブリッドの役割と今後のあり方

北海道科学大学准教授　**細川 和彦**

ハイブリッド配信は、丘珠高校・法邑さん、国際情報高校・内田さん、川原さん、奥川さんと北海道科学大学・細川にて担当致しました。

配信は、昨年度 (第４４回) からコロナ対策の一環と来札が難しい各地の高校生にも参加機会を提供する趣旨で導入しました。２年目となる本年度 (第４５回) は、時節柄ハイブリッドでの参加申込は昨年ほど多くはありませんでしたが、対面申込者のうち急遽来場できなくなった場合などの受け皿としても機能を果たせたと考えます。また、広い会場内での参加は講演者の様子が見難いなどの懸念もありますが、ハイブリッド配信用の映像を会場にも投影することで、会場内にいても聴講環境を向上することができたと考えます。

配信 STAFF は、カメラマン２名、スイッチャー（画面切り替えなど）１名、モデレーター（配信状況の管理など）１名で構成されています。今回、協力いただいた高校生は皆で協力し合い、つつがなく任務を遂行でき非常に心強かったです。

全体を管理した私としては、彬子女王殿下をお迎えしての配信と言うこともあり、非常に緊張感を持って臨みましたが、ヘッドフォン越しにお声を聞き、カメラ越しではあるもののお姿を間近に拝見しながら、発信致しました。

ハイブリッド配信は、生中継だけではなく、記録映像としての保存機能もあります。遠隔地の高校生への参加機会提供に留まらず、翌年以降の運営力向上にも寄与できるものと期待しています。

感　想　　川原　和眞（札幌国際情報高校）

私は放送高校生スタッフとして参加し、普段高校では一度も使ったことのないような放送機材にたくさん触れさせていただく機会となりました。担当の先生は、１から分かり易いように丁寧に教えて下さり、何もアクシデントはなく、とても楽しく参加することができました。

会場では、最初から最後までとてもやわらかい雰囲気で、みんなでまとまっている気がして、一致団結感が出ていました。他の生徒さんは外国や、留学に興味がある人が集まっているようでしたが、普段あまり外国や留学について調べたことのない私でも、興味をそそられる内容で、聞いていてとても面白く、私も質問をしたかったくらいです。また、同年代のみんなが、英語を流暢に話しているのを見て、とても感激しました。

彬子女王殿下の記念講演では、留学の大切さやそこで学べることの大切さなど、たくさんのことを教えていただきました。記念講演はとても面白く興味深い内容だったと思います。

最後の機材の片付けも、先生方と協力してスムーズに行えたと思います。また、参加できる日が来るのであれば、参加したいと思っています。

今回は本当に有難うございました。

（上）ハイブリット担当細川リーダーのもと、４人の高校生が担当

（左）メイン会場の投影画面１例

ご協力頂いた高校の先生より ~Comments from high school teachers~

札幌国際情報高等学校
菅村 朋美　先生

国際交流に関心のある高校生が一堂に会した会場を見て、こんなにも多くの高校生が海外に関心を持ち、コロナ禍であっても機会を逃さず積極的に行動していることを嬉しく思いました。彬子女王殿下のご講演から、特に印象に残ったお話について書かせていただきたいと思います。

「イギリスでは、理系の人でもシェークスピアの話ができます。自分の国について語ることができることは、当たり前のことです」。会場にいた多くの高校生が、ハッとした言葉ではないでしょうか。高校生が進路について考えるとき、最初に課題となるのは文理選択です。英語や歴史が得意な文系の人は、数学や理科が苦手というのはよくあることですが、苦手だからやりたくないで済ませず、世界の人々と関わっていく上で自分の言葉で語ることのできる教養を身につけるために、様々な科目を学んでいくことの重要性を生徒たちに伝えていきたいと感じました。

自分が海外について学びたい気持ちと同じくらい、自分たちの文化や言葉も関心を持たれていることを忘れてはいけないこと、それらを伝えることができる正しい知識を持ち、外国語で伝えることができることが、異文化間コミュニケーションの第一歩であることに改めて気づくことができました。

日本の代表としての自覚を持ち、日本の良さを自分の言葉で紹介できる人材を育成できるよう、努めていきたいと思います。

● ● ● ● ● ● ●

岩見沢農業高等学校
渡部　哲哉 先生

第１部では、彬子女王殿下からは、オックスフォード大学留学中の貴重な経験に関するご講演をいただき、参加した本校生徒も大変刺激を受けたと思います。「海外で生活することは日本の代表として生活することと、その時の交流の中の日本の説明が、今後の日本の印象につながる」「語学は３日・３週間・３か月・３年で上達する」とのお言葉がとても印象的で、小生もかつて同じような感触を渡航先のデンマークでの生活で感じたなと、懐かしく思い返すと共に、これからもこのお言葉に共感し、今後も国際交流をして行きたいと考えたところです。

第２部では、本校生徒が A グループに配属され、スクール形式でのセミナーでしたので、プレゼンテーションを聞いて質問する形式でした。カザフスタン・オーストラリア・内モンゴル自治区・ネパール・カンボジアの様子を聞き、日本に留学されて好印象な部分もありながら、文化の違いに戸惑っているお話もあり、小生がヨーロッパ生活で感じたことと同じなのだと思いました。特にカザフスタンの塩味の発酵乳製品は同じような丸い形状の発酵乳製品がキルギスタンにも存在し、スイスの CIEA の研修時に食べたことを思い出しました。

第３部では、各グループのプレゼンテーション報告でありましたが、今後はコロナが収まり、スクール形式ではなく、参加する生徒も、今取り組んでいる内容を紹介できるようなシステムが取れるようになることを願っております。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。

● ● ● ● ● ● ●

「生徒の多文化共生意識と異文化間協働を伸ばす機会」

立命館慶祥高等学校
山崎　秀樹 先生

本校生徒に貴重な機会をくださり、大変有難うございました。おかげさまで、大変実りのある機会となりました。

この機会は、留学生を含む大学生が高リードし、高校生が主体的に関わること、また留学生と日本の学生が「協働」を通して多文化共生意識を育てる機会として貴重だと感じます。

本校の生徒と留学生４名は司会を仰せつかり、留学生は日本語で、日本人生徒はそれを英語で司会する機会を得ることができました。打ち合わせ会に参加し、アドバイザーの方に助言をいただきながら、練習に励んでいました。

本校のトルコとベトナムからの留学生にとっては、彬子女王殿下に使う敬語や司会をする際の表現を学び、実践する機会となり、本校の日本人生徒にとっては、その司会と息を合わせて英語で表現する機会に恵まれました。互いに自分の言語でない司会原稿を、本校生徒と留学生が助け合い、教えあいながら一つのプロジェクトを成功させた経験は、若い世代が近い将来社会で経験することそのもののように感じます。

共に机を並べ学ぶ間柄ということで、効果的な練習ができたこともあり、彬子女王殿下を前に緊張しながらも、最後まで堂々と司会を務められました。スタッフをはじめ、多くの来場者からもお褒めの言葉をいただいたことは、大きな自信になったのではないかと思います。

Ms. Sanae Takakuwa, Teacher.
Sapporo Yamanote High School

I participated in this event as a high school teacher for the second time. This time, the extraordinary guest speaker, Her Imperial Highness Princess Akiko of Mikasa, made it truly unforgettable.

I was pleasantly surprised that her major at Oxford was the history of the kilt. She kindly provided basic information about the garment for some of the young audience who were unfamiliar with it. I admire her will and determination to pursue that topic to study, which must have been a tremendous challenge for somebody who had been born and brought up somewhere far away from the Scottish culture.

Given that many students who are eager to study abroad have been deprived of such opportunities due to the pandemic for the past few years, this international event has made a big difference. One of my students didn't miss the opportunity to talk to an international student in English, and he felt very proud and happy after having a little chat with him. I appreciate all the time and efforts the people involved in this event had put in making it a great success, even in the midst of the pandemic.

札幌聖心女子学院高等学校
塩田　みな子 先生

この度は、大変お世話になりました。多くの時間を割いて、ご準備くださったお陰で、生徒たちも本当に貴重な経験をさせていただくことができました。隅々まで行き届いたお気持ちをここそこに感じ、有難く思いました。

何より、世界が束の間ひとつになったような、平和な時間を過ごすことができました。引率の私にとっても、得難い経験をさせていただいたと思っております。

今回は、皇族の方をお招きして…という新たな緊張感もあり、これまでにも増してお疲れも多かったことでしょう。改めて深く感謝申し上げます。ありがとうございました。

北海道科学大学高等学校
林　祥史 先生

去年３月に１０年ぶりに札幌に帰ってきました。２００８年に大学進学で北海道に移り２０１２年に卒業して以来です。

東京で就職し、それから海外の大学院に進学し、ひととおり自分が見たかったもの、経験したかったものは済ませた実感があります。そして、現在はそれを未来に活かす場所がほしかったのです。

札幌は自分の夢を叶えてくれた場所です。それゆえ自分にとってはいかなる見返りも必要なく、この企画を通して何か自分が役立てられたのならば有難いです。また、通常であればこの先知ることのなかった他校の先生方や生徒たちをはじめ、多くの人に出会えて、とても幸せでした。

とりわけ彬子女王殿下は、自分がオックスフォード大学にアリストテレスの研究で留学していたちょうど同じ時期にいらっしゃり、その方と１０年以上経ってお見かけする機会が札幌であるなんて、人生は不思議だなと思います。

有難うございました。

“第 45 回開催への道のり”

＊**９月７日 第１回実行委員会開催：**今年度は「第４５回記念」、１２月１１日（日）彬子女王殿下をご講演者にお迎えし “若者よ、世界へ、Part Ⅲ“としてセミナー方式での開催を決定した。広い世界へ大きな夢と関心を持つ高校生を対象に、第１部記念講演に続いて第２部では、世界約２０カ国の大学や高校留学生が各国の歴史や文化、教育について語り、質疑を通じて知識と理解を深めることとした。

＊**９月１３日 高校生参加者募集開始**（定員１８０名、内オンサイト１５０名、オフサイト３０名）。

＊**９月３０日 第１回運営委員会開催：**２０カ国の Speaker など役員が決まり、準備活動が始まる。

＊**１０月２７日 第２回運営委員会：**記念ナイトの運営スタッフとして、高校生を前面に出すことを決定。

＊**１１月１０日 第３回運営委員会（拡大）：**Speaker や高校生アシスタントなどほぼ全スタッフの５５名が出席、各グループ代表より方針の発表。Emcee ならびに Remote も方針を発表した。

＊**１２月３日　第２回実行委員会：**実行委員会参加の主要団体の担当者が出席、彬子女王殿下を迎える開催当日の役割分担等について詳細は実施計画を決定した。

１２月１１日（日）第４５回記念ナイト開催

開催日当日、第１部記念講演の京王プラザホテル会場ロビー。待ちかねた高校生たちは、10時からの受付を終わって次々と会場に入場、一気に活気づく（下）

（第3種郵便物認可）　2023年（令和5年）1月29日（日曜

皇室点描 №192

亡父ゆかりの札幌で講演

三笠宮家の彬子さまが先月、札幌市を訪れ、国際交流行事「サッポロ・インターナショナル・ナイト」で講演された。父の寛仁さまが生前に、この行事の主催団体の名誉評議員を務めた縁があった。

寛仁さまと札幌との交流は、半世紀前の札幌冬季五輪に遡る。英国留学から帰国した直後の1970年10月、現地の大会組織委員会事務局で働き始めると「皇族がサラリーマン生活」と話題になった。

読売新聞のインタビューで寛仁さまは、留学経験を生かして「外国の役員、選手には心から面倒をみたい。特に遊びは自信がありますよ」と気さくに語られた。大会が終わっても地元のスポーツ振興や障害者福祉に尽力された。

彬子さまもこの日、英国に留学した体験を高校生らに披露された。「世界観が変わる」と海外で学ぶ意義を強調し、「国の代表として日本の魅力を海外に伝える役割を忘れずに」と助言された。

実体験に基づく話に引きつけられるようにメモを取る生徒の姿があった。札幌との縁を大切にした父のように、彬子さまも集まった地元の生徒らに温かなまなざしを送られていた。

社会部　水野祥

札幌市内での国際交流行事で、あいさつされる彬子さま（昨年12月11日）＝北海道青少年科学文化財団提供

若者の活動体験こそが国際交流の推進力

堀内　満智子（北海道青少年科学文化財団理事）

彬子女王殿下をお迎えして開催された、第４５回記念サッポロ・インターナショナル・ナイト。第一部、彬子女王殿下のご講演に続き、第二部は 京王プラザホテルで、オンラインを利用した世界選抜ハイブリット形式グループ (D) と、かでる２・７会場での世界地域別３グループ (A・B・C) の留学生によるレクチャー形式の発表となった。京王プラザホテルで実施された第三部は、彬子女王殿下ご臨席のなか、留学生・高校生 MC のもと、各グループのコーディネーター、アシスタントが、パワーポイントで発表内容を紹介。第３部に参加した、多くの高校生達は、２２か国の地域特性・文化・教育・高校生の生活・日本との違いなどを知り、視野を広げる機会となった。

今回、かでる２・７会場担当で、女王殿下と同行し、違った視点から今回の開催を見ることができた。留学で日本を学ばれた経験のある彬子女王殿下が、学生たちの発表を一生懸命に聞かれているご様子。ご臨席のなか英語や日本語で文化の違いや留学について活発に質疑応答をする留学生や高校生。コロナ禍で、SNS などを駆使して運営計画の進行に関わった発表者・コーディネーター・アシスタント学生達や彼らを支えるアドバイザーの皆様の努力と熱意の体験。この活動こそが、これからの国際交流の礎になると感じた。

最後に、横田実行委員長をはじめに、実行委員会のメンバー、サポーターほか多くの皆様のご尽力に心から感謝しています。

サッポロ・インターナショナル・ナイト実行委員会

第４５回に参加した実行委員会登録団体

◎北海道大学　◎札幌国際大学　◎札幌ユネスコ協会　◎北海道高校ユネスコ連絡協議会
◎国際ソロプチミスト（札幌、札幌ノイエ）　◎国際ゾンタクラブ（札幌Ⅱ）　◎北海道国際女性協会
◎国際ロータリー 2510 青少年交換委員会　◎北海道日豪協会　◎北海道日米協会
◎北海道フィンランド協会　◎AFS 日本協会札幌支部　◎HUISA 北大留学生協議会
◎北大学生ボランティア相談室　◎いけばなインターナショナル札幌支部
◎北海道国際交流・協力総合センター　◎道青少年科学文化財団

新型コロナウイルス感染等のため参加を見合わせた団体

◎小樽商科大学（国際交流センター）◎北海学園大学（国際交流委員会）◎札幌大学（国際交流センター）
◎北海道情報大学（留学生支援）◎国際ロータリー 2500 青少年交換委員会　◎北海道ユネスコ連絡協議会

第４５回参加札幌圏内高等学校（順不同）

◎札幌開成中等教育学校　◎札幌国際情報高校　◎札幌藻岩高校　◎札幌丘珠高校
◎札幌東高校　◎札幌新陽高校　◎立命館慶祥高校　◎札幌聖心女子学院高校
◎札幌藤女子高校　◎北星学園女子高校　◎札幌静修高校　◎札幌山の手高校　◎札幌創成高校
◎札幌日本大学高校　◎岩見沢農業高校　◎北海道科学大学高校　◎札幌光星高等学校

主催：一般財団法人 北海道青少年科学文化財団

理事長：岸浪建史（北海道大学名誉教授）、副理事長・専務理事：井口光雄（実行委員会専務理事）
実行委員長：横田　篤（北海道大学理事・副学長）、理事；河村耕作、堀内満智子、事務局；鈴木夏子
記録集制作：編集責任者 井口光雄（執筆・割付）、鵜殿倫子 (校正)、定居孝行（写真撮影）
中村信夫（デザイン）、印刷：佐藤印刷株式会社

【コロナ禍後に光、第４５回の成果】

北海道青少年科学文化財団専務理事　**井口 光雄**

今年のインターナショナル・ナイトは、半世紀近いその歴史の中でも特筆されると言えよう。

それを端的に象徴したのが、冒頭に行われた彬子女王殿下の記念講演で、出席した全ての人々に強いインパクトを与えた。「殿下の講演に感動、自分の国日本を、自信をもって紹介したい（日本人高校生）」「We were honored to meet Princess Akiko. Her speech was really inspirational.（スリランカ高校生）」など喜びのメッセージが数多く寄せられ、私は彬子様を名誉評議員に推戴している喜びを深く噛みしめた。

３年前から続くコロナウイルス禍による制約からの脱出という面でも、大きな示唆を与えてくれた。今年は当初から高校生を単なるアシスタントではなく、舞台の前面に出そうという方針で臨んだが、彼らは十分に応えてくれた。また、これまでの Face to face の準備会議に代わって、各グループはラインを多用した。若い彼らは十分に活用し、実質的なスタッフ会議は１１月の拡大会議のみで乗り切ることが出来た。

５年前の第４０回から大きく変わったのは、高校生の躍進と大学生の減少、留学生も大学院生が主体となったが、大学院の留学生が英語力でも難のある高校生を優しくサポートしてくれた。

第４６回以降はどのように進むか。政府が脱コロナに踏み切りつつある今、待望のディスカッションへの回帰は当然と思う。だが形は以前とはかなり異なるだろう。この数年で学んだ貴重な経験が生かされる。つまり、「大いに学び、語り合おう！」。今回、ある日本人高校生スタッフは「外国の高校生や留学生と多くのトピックについて話し合うことができた素晴らしい時間だった」と語ったが、第４６回からは、スタッフのみではなく、参加者全てが、その「素晴らしい時間」を共有出来る形に持っていきたいと強く思う。

北海道青少年科学文化財団は
次世代を担う青少年の育成に努めます

2023 年度の主な財団活動

第３２回先端科学移動大学

共催：旭川市市教育委員会
後援：北海道大学、北海道教育委員会、北海道高等学校長協会、北海道高等学校理科研究会
北海道新聞旭川支社、NHK 旭川放送局（予定）
「道民カレッジ（主催・北海道立生涯学習センター主催）」連携講座
第１日 高等学校訪問授業：１１月中旬（金）
（旭川東高校、旭川西高校、旭川北高校、旭川南高校、旭川永嶺高校）
第２日 先端科学移動大学（市民講座）：１１月中旬（土）　旭川市内会場

第４６回サッポロ･インターナショナル･ナイト

１２月１０日（日）　日本と外国の壁を取り払い、大いに語り、交流を深めましょう
（会場）かでる２・７、京王プラザホテル札幌

(一財)北海道青少年科学文化財団

〒064-0809　札幌市中央区南9条西3丁目　パークビル4F
Tel:011-788-2011　Fax:011-788-2211　Mail:zaidan.ho@tune.ocn.ne.jp
Homepage: http://hokkaido-seishonen.com

[主　催：SPONSOR]
一般財団法人 北海道青少年科学文化財団
The Hokkaido Youth Foundation for Science and Culture

[共 催：CO-SPONSOR]
(公社)北海道国際交流・協力総合センター、札幌ユネスコ協会
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center、Sapporo UNESCO Association

《企画・運営:Planning & Management》
サッポロ・インターナショナル・ナイト実行委員会
Planned and executed by The Sapporo International Night Executive Committee

一般財団法人 北海道青少年科学文化財団
THE HOKKAIDO YOUTH FOUNDATION FOR SCIENCE AND CULTURE

〒064-0809 札幌市中央区南９条西３丁目 パークビル４Ｆ
4F Park bldg., Minami 9, Nishi 3, Chuoku, Sapporo, 064-0809
(Tel) 011-788-2011　(Fax) 011-788-2211　(e-mail) sapporo-i-n@ace.ocn.ne.jp
(Home page) http://hokkaido-seishonen.com

編集責任者：井口光雄（副理事長・専務理事）　2023/3/10